

俳席の掟

一 藪は三石の掟を守るべし  
 茶の花の比なら茶も盛んな  
 一 汁一ツ茶一ツ酒の肴も一ツに限りて趣に精進  
 の旨なのもさへ夏は必茄子を用ひ豆腐は三季に  
 わたるべし香の物は論ずるにたらず  
 音も香もさびや豆腐の冬籠  
 一 酒は膳の前をすべし三盃を過へばさるるも  
 一 盃は御道具をゆさすべし  
 いのまに四たびはくとし村しくれ  
 連茶に酒すきありて此ヶ條の掟にはなほたく  
 るしむらつて下蘭の一句をしめす  
 狐さへ五、んとしる霜夜かな

俳壇  
 偉人  
 横井也  
 有

俳諧の道に戀ひ、俳文  
 の妙を探らんもの、誰か  
 それ、有也の恬淡洒落なる  
 雅懐を慕はざらん。誰か、ま  
 た、鶉衣の颯逸自在なる詞藻を  
 愛せざらん。也有は實に俳壇獨  
 歩の曉將にして、うづう衣々  
 翁が洋々たる雅懐より溢れ  
 る俳文なり。げに千古の  
 逸品、文海の珠玉ぞや。



俳人横井也有

目次

第一章 緒論

正風の勃興……檀林風の廢頽 芭蕉の入寂……蕉門の紛争  
其角の洒落風……不角の化鳥風……支孝の美濃風 俳壇の俗  
了……點取俳諧の流行 也有の出顯……也有の眞價

壹頁

第二章 也有が略傳

也有が家系……也有が出生 也有が學問……  
也有が略譜……也有が勳功 也有が病癘……  
致仕後の也有……也有の卒去

六頁

第三章 也有が俳諧

也有が俳師……性來の嗜好 也有が俳諧に於け  
もなし門人もなし 也有が俳諧に於ける見解……





ならず。 也有が俳句……その妙處。

### 第四章 也有が俳文……

也有は俳文の大家也……その俳文は俳諧に優る。  
に於ける見解……雅俗を調和すべし。 也有が俳  
句……也有の知る處にあらず。

### 第五章 逸事遺文……

也有が雅號。 也有が著書。 也有が詩歌。

### 附 錄 鶉 衣……

- 摺鉢傳 ○木屐說 ○朝寐辭 ○鼻箴 ○借物辯 ○物忌翁傳 ○剃髮辯 ○臍頌 ○夜着頌 ○吊不幸文 ○一德辯 ○拾扇說 ○謝無馳走辭 ○送咳氣神表 ○燒蚊辭 ○新古庵記 ○鳥獸虫魚の掟 ○奈良團扇贊 ○案山子辭 ○糸瓜辭 ○百蟲譜

## 俳壇 横井也有

### 第一章 緒 說

絶。代。の。詞。豪。芭。蕉。翁。が。一。た。び。幽。玄。閑。寂。な。る。俳。諧。を。吹。鼓。し。て。所。謂。蕉。風。の。一。派。を。開。き。徒。に。新。奇。を。競。ひ。談。諧。に。馳。せ。て。俗。化。極。り。な。き。古。風。檀。林。の。圈。堵。を。蹴。破。し。て。よ。り。天。下。の。俳。壇。は。悉。く。こ。の。新。俳。風。に。風。化。せ。ら。れ。敢。へ。て。又。獨。歩。の。俳。風。を。唱。導。し。て。雌。雄。を。俳。壇。に。決。せ。ん。と。す。る。も。の。あ。る。を。見。ず。こゝに於いて蕉風は奔流さかまく勢を以て、滔々として天下の俳壇を蕩盡し、古來の俳風こゝに一新して、一時天下の俳壇を風靡せしめし檀林派の如きも、僅に團水、沾徳等によりて、縷々たる俳系をつなぐといへども、その風調にいたりては、全く宗因時代の風骨を脱却して、いとゞし



く蕉風の句格に近づき來れるを見る。

されば翁の詞藻を慕ひ、その教をこはむとして、翁の門に集るものその數を知らず、たゞにその才藻を慕ひて、四方の雅人騷客が、翁の門下に蟻集したるのみならず、翁もまた自ら四方を行脚して、到る處にその幽玄清致なる詩想を漏したれば、翁の門人は、遂に全國に亘りて、あらざる處なく、翁は、實に當時の陳腐せる詞藻界を革新せんとして現はれたる詩神のこゝとく、崇敬せられて、遂に俳諧は、蕉風の一に歸したるがこゝとく、大勢とはなれり。

然るに、元祿七年十月、芭蕉が難波の逆旅に在いて、一旦溘然として遷化するや、門弟各々その門戸を張りて相下らず、互に俳壇の牛耳をとらんとして、一度蕉風によりて統一せられたりし俳壇は、再び又紛然として乱れて、麻のこゝとく、或は豪放、岩落一世を罵倒して、議論すくめに、天下を

風靡せしめんとするものあり、或は輕妙、嶄新なる謎句的俳諧を工夫して、浮き易き人心の嗜好に投合せしめんとするものあり、その極、天下の俳風は、滔々として俗化し來り、遂に又底止すべからざる大勢を呈するにいたりぬ。中にも其角の洒落風と、不角の花鳥風とは、一時東都の俳壇に相拮抗して、天下の俳風を操縦したりといへども、これらの俳風は、たゞその輕妙なる滑稽調と、謎やうの秀句とによりて、巧に當代の時好に投せしのみにて、蕉風獨特の幽玄清致なる俳想のこゝとくは、全く投げ捨てられて、遂に蕉翁時代の高雅閑寂ある俳諧は、容易に見ること能はざるほどのあさましき世とはなれり。當時又支考が美濃風も、一時なか／＼に勢力を逞うしたるものにて、名義上蕉風の後をつぐといへども、これ又、卓朗が、「中頃、芭蕉風といふもの、世に唱ふるといへども、多くは支考が手筋にして、風格下りて、偏に野夫村童の雜談に異ならず、これを



祖翁の風調に比ぶれば、水と水晶との似てその物にあらざることを、秀の  
苗を見るがごとし。」といへるがごとく、その詩想はいよいよ下りて、俗  
談平調見るに足るものなし。蕉門中、最も才物のきこえありし支考にし  
て已にかくのごとし。滔々たる俗輩にいたりては、何ぞ談るを要せんや。  
かくのごとく、亂然として、俗化し、來れる俳壇はいよいよ墮落して、底止  
する處を知らず、遂に俳諧を以て糊口營利の途となし、點取俳諧の陋劣  
なる弊風を作り出し、由來玄妙高潔なる俳諧も、今は全く卑野陋俗なる  
紅塵の裡に埋歿せられて、又思ふものあきに至る。俳壇の俗了、何ぞそ  
れ甚しきや。  
この秋風落莫たる俳壇に立ちて、確乎として動かす斷然として屈する  
どころなく、已は渡世俳諧にあらずと稱し、一向たのが思ふまゝ、感ずる  
まゝの風雅と滑稽とに遊び、蔚然と時俗の陋風を超越して、獨歩の俳名

を顯耀せしめたるもの、これ實に尾州の俳壇にその人ありと知られた  
る半掃庵横井也翁にあらずや。翁の雅懷や、深々として海のごとく、翁  
の筆力や、靈妙にして鬼神のごとし。しかも、その身は、尾藩譜代の重臣に  
ありながら、冷然として俗界の名利を放擲し、城南の別墅に世を遯れて  
敢へて昔日の勢威を知らず。風流韻事に日を消して、悠々閑適、一世を全  
うせし翁が宏量雅懷實に驚くに堪へたり。  
かゝる蓋世の大詞豪が、蹶然弓馬の家より躍出して、當時の文壇に燦爛  
たる光彩を放ちたるにもかゝはらず、世人の多くは、たゞ尋常一様の俳  
諧師とのみ思うて、山人野客のごとく冷々に看過して、敢へて顧るもの  
なきは何ぞや。  
六樹園嘗て也有を賞揚していはく、「あはれ、六徳備へし君子にてれば  
しけるを、十徳著たる俳諧子とのみ思ふめるは、ばくものをのみみにふ



れし古着の市のふみちがへなりけり」といはれたりしが、げにそのふみちがへたる人のみ多きこそ口惜しけれ。吾人が、たはげなくもこの文壇の偉人、獨歩の俳翁を品隲せんと思ひ立ちたるも、全くかのばくものをのみ目にふれし、ふみちがへの人々の誤解を破らんと欲してなり。

## 第二章 也有が略傳

亂れはてたる俳壇の趨勢が、日を逐うて、ますます、陳腐俗了し來れる時に當り、世の毀譽榮辱を空吹く風ときい流し、獨高潔洒落なる俳諧の秘奥に遊んで、一世を風流韻事にさしげたる也。有が瀟洒たる性行と、清新なる雅懷とは、吾人が深く羨慕して措かざる所なり。吾人が、この絶代の俳翁を知らんと欲せしこと一日にわらず。ざるを不幸にして、未だその詳細なる傳歴を知ること能はず。たゞ一二の斷篇零章と、數種の翁が著

書とによりて、僅にその一端をうかがひ得たるのみなるこそ、實に遺憾のきはみなれ。されば、こゝに記す所も誠に吾が管見憶測によりて、辛くも綴りなしたるものなれば、元より飽かざるふし、足らざる所多かるべきも、今は、た、い、か、い、は、せ、む、幸に世の高教を俟たんのみ。

今、しばらく翁の傳歴を述ぶるに先立ちて、聊かその家系を尋ぬるに、その先は實に北條時行に出づ。元弘年中、高時の誅罰せらるゝや、時行は流浪の身となりて、歸すべき處もなかりしが、その後、赦免せられて官軍に屬せり。その子、時滿、尾州、盤江村に住す。時滿の子、時任に至りて、遂に横井村に移住し、始めて横井氏を稱す。時任より六世の孫、時朝、織田信長に仕へて、屢々軍功あり。後、又、徳川家康に轉仕し、關ヶ原の役、軍忠を拔んず。家康之を賞し、尾州、海西郡、藤ヶ瀬の采邑、二千二百八石九斗三升を賜ふ。後、代々尾張侯に奉仕す。時朝より四世の孫、時英は實に也有が祖父にして、

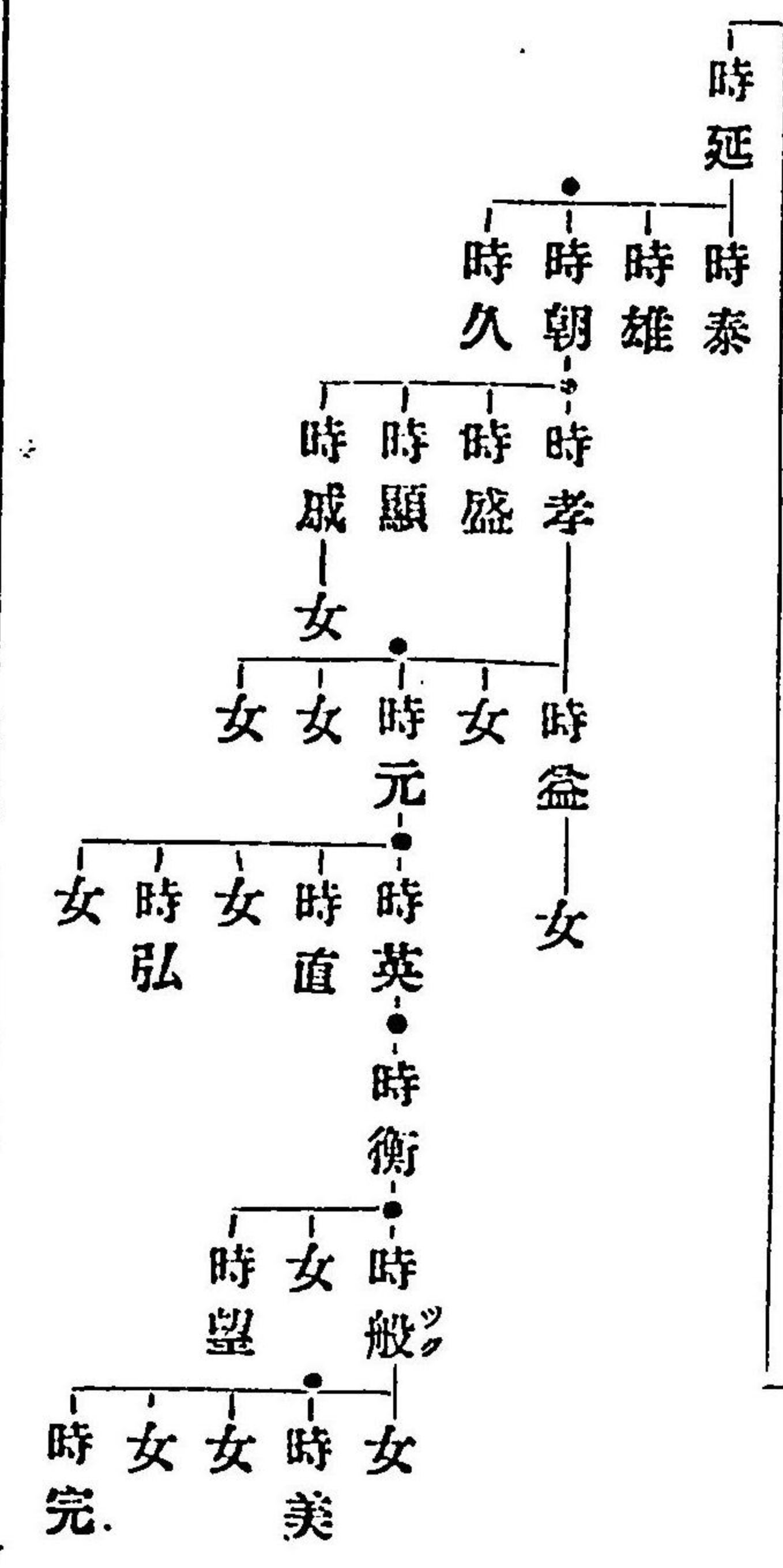


世祿千石をうけて、參政の職にあり。也有が十四才の時、壽八十を以て卒す。その子時衡は、則ち也有が父にして、也有が二十六才の時卒す。壽五十四。

北條

高時—時行—時滿—時任—時利—時永—時勝

横井



也有が家系は、かくのごとく連綿として、累代尾州藩の重臣要職の列にありき。也有は實に時衡が二十七才の時の子にして、則ち元祿十五年九月四日を以て生る。幼名を辰之丞といひ、通稱孫右衛門、名を時般と稱す。翁が少壯時代は、いかなる家庭に養育せられて、又いかなる教育によりて薰陶せられたりけむ。吾人は、未だその詳細を知ること能はざれども、家もと尾州侯譜代の重臣にして、高千石に餘る祿士なれば、刀鎗弓馬の道は、早くより修養せられて、最も練達の功を積みたるものごとく、又、夙に藩學小出洞齋に従ひて、前聖碩哲の道を究め、諸子百家の説に涉りて、その闊奥を極め、よく政道の大本を明かにし、治國の術策に通じたりけむ。

同藩の堀田方舊翁が著書、嘉業集の梓行せらるゝにあたりて、その巻頭に序していはく、



嗟公本藩良家也。其先出北條平氏。號橫井氏。祿踰千石。職歷參政。不爲不貴也。少壯留意武事。靡伎不習。臻其妙。而詩書其因也。自聖賢傳諸子百家。以至野史家乘稗官小說。罔不旁羅搜索。畢究其闡奧也。是今之世不多親焉。然數仞其臆。人鮮得窺。是以唯知其善俳而已。甚則以謂山人野客也。此其所以自樂。而吾輩所以深嘆也。(拔書)

この言、世の通例ある序辭のごとく、少しく賞賛にすぎたるものとすども、以て也有が、少壯時代に於いて、文武の兩道に練熟せられたりしを證するに足るべし。

又、同藩の津金胤臣が、俳諧夢之蹤に序していはく、

藤瀬横井氏。名時般。又稱並明。又稱順寧。其未壯攝清要。在要府爲名臣。其所以草討修澗者。于今爲模範。又攝柳將之親軍。不啻射騎劍矛。是利達神武不殺之勇。受學小出氏。家道節儉廉靜。慕國知與不知。仰望山斗。(拔書)

と、吾人は、これらによりて、翁が學は、これ小出洞齋の陶冶に基けるものにて、家にあつては節儉廉靜、官に仕へては、謹嚴明察なりしことを知る

といへども、又、深くその間の消息を知るよしなきをせひあきや、

近き頃、大久保の幽清なる閑居に世の俗塵を遁れさせ給へる中田憲信翁は、左のごとき也有が略譜をめぐられたり。

時般 辰之亟 市郎平 孫右衛門

元祿十五(壬午)年九月四日生。

享保二(丁酉)年八月十三日。拜謁于繼友圃。

同 十二(丁未)年六月廿五日。繼父家領。食祿如故。爲尊師寄合。

同 十五(庚戌)年正月九日。爲御用人。

寬保元(辛酉)年四月十三日。兼大番頭。

同 四(甲午)年二月廿八日。加倍二百石。

延享三(丙寅)年二月廿八日。江戸定御供。

同五(改元戊辰)年二月廿五日。兼寺社奉行。

寬延三(庚午)年五月十一日。依病辭職。爲尊師組寄合。

寶曆四(甲戌)年八月廿三日。依願致仕。號暮水。又稱並明。

天明三(癸卯)年六月十六日卒。八十二。法號並明院朝雲暮水。



これ嘗て尾張の人村上某が細井要齋の手録中より得たりとて、讀賣新聞三七四號紙上にて世に公にせしものよりや、詳密なるも大体に於いて異なることなし。これ等の略譜によるに翁が官途に上られし首途は享保十五年の春にして初めて御用人の列に入りしが寛保元年には御番頭に進み同じき四年には二百石の御加俸さへありきといへば翁が藩主よりいかに斜ならざる眷遇を被りたりしかや、推知することを得べし。その治蹟勳功等これ又知るよしなきも深く一藩に敬服せられたりといへば必ずや幾多の勳勞を重ねて不次の恩賞にもあづかりしならん。翁の狂歌集行々子の中に主君より褒賞のことありて、紗綾二反を賜はられし時。

ぬけでたる手がらもなきになまぐらの  
身にはすぎたるさやの御褒美

なご、口ずさまれしことをのせたるにても知らるべし。蓋し忠直精勵なる翁のことなればかゝる褒賞を忝うせしこともしはく、なりしならん。然るに翁少年の頃より俳諧の道を嗜まるといふこと深く、身官途にありて吏務に駛掌せる頃といへども致仕の暇には一向この風雅の道に遊びて、以て平常の鬱悶を慰めたり。老來その嗜味はいよいよ厚く、剩へ病痾をさめ難くて世上の俗塵いよいよいとはしく、遂に寛延三年の夏願に依りて御役義を免せられ、三年を越えて寶曆四年の秋八月清らに澄める月を光に草深き前津の里に世を遁れて、露に咽べる虫の音のあはれをこゝに知る身となりぬ。時に年五十三。その時の詠に、

あればとて世にも知られぬ身を更に  
かくれ顔なるよもぎ生のやど



と。口。さ。が。な。き。世。俗。の。榮。辱。を。通。れ。て。又。前。日。の。貴。勢。を。知。ら。ず。こ。れ。よ。り。専。ら。風。煙。の。道。に。向。ひ。て。い。よ。く。そ。の。秘。奥。に。入。る。

隱居辨は實に翁が致仕の理由を詳かに説けるものなり。いはく、

そもや、我が身の上をいはい、かしこき隆を頼み奉り、官路に立ちしも久しけれども、もとより毒にも薬にもならねば、人にあかれし身をも覺えず。雨露のめぐみ深くして、すなほまる國に鬼もなければ、世の人に我もあかす。只病になやまされ、今は弓もひきがたく、馬にも乗りがたく、さても、武夫の名にがすまへられんは、南郭が竿を吹きけん、この身のはづかしければ、老と、病とを一術にして、浮世の關はのがれいでたるなり。(抜書)

と、人にもあかれず、人をもあかさし、也有が飄然として草墅に身をかくしたるは、全く病病の責にくるしみてのことなり。然れども、これ或は皇天翁が稀世の雅懷を惜しみて、しばらくその身を閑散ならしめて、以て天地自然の妙境に遊ばしめたるものか。

也有は病を以て世を逐れたり、然れども、その瀟洒清廉ある前津の風光と洒落高雅なる天賦の風流とによりて、翁の病は、日を逐うて快く、やが

て舊時の健康に復したり。爾來翁は世にも珍らしきは世の嬰鏢たる老爺となれりき。

内津草に翁自ら老後の健康をわやしみていはく、

いでや、身の一たび病つきてより、つやく世をはかなみ、たじかけらふの夕をまつ心地しつれば、賜はりし蘇をもかへし奉り、遂がもさにかくれしは、廿年の昔なりけり。そのためならぬものからとみに仕への途を退れ、自ら名利にかづらふ心の疎くなりてゆくや、なか／＼命つれなきたつきさやなりけん。稀てふ歸しかぞへ過ぎて、この秋はかゝる山ぶみなさへ思ひ立ちし我が身よく知れる我が心のわやしきまでになむ。(抜書)

と、かくの如く致仕後の也有は、めづらしきまで健ある身となりて、かしの山ぶみに緑滴る苔の細道をたどりては、鬱しはてたる詩惱を洗ひ、こいのをいゝるさに百鳥唄ふ花の里べを探りては、心はるけき吟詠を逞うし、世にも媚ひす人にも阿らず、獨天地自然の妙境に遊んで、たのが天賦の嗜好を全うせしめられたり。



さるからに、翁が前津の幽棲も、いつしか花の蹊となりて、梅を慕ひ、かげを追うて來れるもの跡を斷たず、却てこの閑適の翁をして送迎に暇なからしめたり。

知雨亭後記にいはく、

つらく我が身の上を思ふに、幸に上國世臣の家に生れて、不肖の身のたげなくも、父祖の祿を傳へ、剩へ。こちたき官に承乏して、南郭が竿を吹きしも二十とせあまり、例へば、狐狸の人らしく化けて、よく尾を藏したるがごとし。程ふるまふに、しかすがに、青松葉の母を恐れて、自ら妖の皮を脱ぎ、香餌の心鉢を顯はし、卒に蓬蒿のみに穴を營み、かく世の外に餘齡を守るなり。知雨の因縁かくのこさし。今は燒炭にも迷はじとこそ思へるに、人や、穴を喚ぎつけて、わびたる柄も面白きやらん。今は豈に道ふかひろげて、腹つみの閑を妨げらるるこさしはくあり。されども、しか厭ふは塵客のこさ、孤松のあるとは、同調相應するの人、世にいふ二つ穴の狐なれば、來んくさいはんには、昆布に、山椒の澁茶をまうけて、我も、また快々かたらふべし。(抜書)

と、韻人舊知それかくのこさく、翁の草蓆に集ふといへども、昆布に山椒の澁茶にて、快々とかたらひて、敢へて厭色なき翁が雅懷の宏量なる、實

に驚くにたへたり。

かゝる幽清高雅なる境界に遊んで、餘命を風流韻事に托したる仙骨也有翁も、遂にまた、必滅の理に漏れず。天明三年六月の半頃より、かりそめのなやみたはせしが、あはれ、その月の十六日の巳の刻ばかりに、溘然として長逝せられたり。時に年八十二。辭世にかく、

病來辭世路。久隱舞津農。八十餘年夢。驚回曉遠鐘。

きのふけふと思ひつゝ、へし身の程を

なかくながき世はかぞへぬる。

短夜やわれには永き夢さめぬ。  
八十餘年の人生を夢とさとりて、又、何の思ひわくこどもなく、永き眠のさめたらんやうにて、入寂せられたり。翁の高量雅懷、今さら驚くべきにはあらぬぞ、何ぞ、それ、悟道の大なるや。



なきがらは、同じき十九日、御在所なる藤ヶ瀬の西音精舎に收められ、法名を並明院殿朝雲暮水大禪定門と申す。偉人の靈、永く坏土の下に眠りて、今、たい松露をばらふ夕風の空しく追慕の袖をうるはすのみ。

第三章 也有が俳諧

也有が傳歴につきては、はゞ前章に於いて略述したり。いでや、これより翁が奇警飄逸なる滑稽的雅懐より進出したる俳諧に就きて、少しくその潤大なる見地と、高華なる詞藻とを探りてむか。

也有が俳諧は、誰によりて陶冶せられたりけむ。吾人は、未だその詳細を知らずといへども、翁が少壯の時、師事せりと傳ふる者三人あり。一は山本荷兮、二は太田巴靜、三は田中五竹なり。これ等の三俳師は、いづれも尾州の俳壇に噴々たる名聲を轟かされしものにて、中にも巴靜、五竹の如

きは、當時美濃風の開祖として、一世を震動せし、俳壇の驍將軍、東花房支考が親弟なれば、少壯なる也有がこれ等の諸俳老の間を往來して、問ひもし、教へられもしたりしことは、疑ふべからざるがごとし。近き頃、岡野知十といふ人、この間の消息を斷じて曰く、

也有年少の時に於いては、なほ芭蕉の親弟少しせす。露川は尾にあり。支考は濃にあり。しかも、二人が論戦は頻りありし時なりき。荷兮が没年は、未だ詳にせざれば、その也有が年少に於いて、之に従ひしや。否やは知らずといへども、想ふに荷兮が同藩の古俳として、なほ存在し、後輩の也有が、之に俳諧を問ひしはあり得べき所なるがごとし。然るに、美濃風の勢力は、漸く尾を風靡し、巴靜、その他、支考門のこの地に起るに於いて、その巴靜に憑りてか、はた、五竹によりてか、或は、直に支考につきてか、兎に角、美濃風の俳諧に一わたり通じたるは、明かなるがごとし。

と、也有が俳諧は、誠にかくのごとくして、多少の鍛錬陶冶を被りたるには相違なかるべし。然れども、翁が俳諧は、天賦なり。性來の嗜好なり。決して師によつて修得したるものにあらざるあり。翁がその弟子、晋路に與



へたる辭に、

不佞少年の頃より、俳諧を好み、今老境にもこの一癖はやまず。

といはれたるを見ても、也有が俳諧は、全く性來の嗜好にして、造詣素より、淺きにあらずりしこと明かなり。ましてや翁が祖父、野双翁も、また、俳諧を嗜まるゝこと深く、嘗て北村季吟の門に遊びて、その長子、湖春等と互に詞藻の巧拙を闘はされしことあり(巴菴本兒三吟十二表)といへば、也有が性來の詩的性情は、已にその家庭に於いて、慈愛深き祖父のやさしく雅びたる詩想によりて、いよいよ涵養發達せしめられたるや明なり。それ然り也。有の俳諧は、天賦なり。その奇警洒落なる思想は、先天的に俳諧をなせるものあり。何ぞ當時の點取渡世の俗俳諧者流に師事して、くだらぬ法式に拘泥し、天資の詩想を束縛せられて、その洒落放逸なる雅懷を傷くるが如き愚を學ぶを要せんや。翁常に人に談りて曰く、我に俳

諧の師もなく門人もなし。たゞ正直なる小兒の舌しどろにいひ出せるが、れのづから五七五に叶ふべし(俳家奇人)と、翁は、實に人に師事することを好まざりしなり。況んや、當時の渡世俳諧者流に従ひて、已が天賦の詩想を撓屈せらるゝがごときは、翁の斷じて取らざる所なり。已に我が詩想を撓屈せらるゝを欲せず。又何ぞ他人の天才を傷ふに忍びんや。與晉路辭に、

不佞、少年の頃より俳諧を好み、今老境にも、この一癖はやまず。是を幽居の友とすれば、何知り得たることしなれども、さすがに年久しきに迷ひて、人はゆかしくも思ふやらむ。敲推を問ひ寄るもあれど、師弟に似たるを慙ぢいさへば、身の薄劣を告げて、固く辭し來れり。

とあるを見ても、也有は人に師と呼ばれ、弟子と稱せられて、徒に奔放自在なる後輩の才藻を規制して、その天賦の詩想を妨害せんことを怖れたること明かなり。也有が俳諧に於ける眼識は、誠まかくの如く、濶大にして、翁の眼界には、



法式もなければ、門派もなし。又、何ぞ人物の如何を問はんや。故にその説の探るべきはこれを取り捨つべきは之を捨て、敢へて又、憚る所なかりき。(有功子に與ふる書による)

更に翁が與晋路辭を一讀せば、也有が俳諧に於ける識見が那邊に存せしかば、自ら明瞭なるべし。その辭にいはいはく、

古人いはずや。和歌に師なし。況んや俳諧に於てをや。たゞし、法式は習ふべし。されども、その道に交れば、法式は自ら知りぬべし。法といへば、理非の穿鑿なし、天下の公道にして、隨分人の知るべきを事とす。

秘する法はあるべからず。しかれば、世に秘事口訣するは何ぞや。物に用捨の心得あり。或はてにこれを習あり。夫は皆當然の理にして、我が智明かなるときは、已さ知りて、無理はいはず。我の一理を知るべきは、万端に渡りて物皆明かなり。師はたゞ暫く東西を指すのみ。例へば、詩、文章を學ぶ人の秘事口訣といふ

ことは、一もなし。然れども、上手あり。下手あり。たゞ我がオのなす所にして、何ぞ別に秘事を賣まむ。世に秘事傳授といふものは、渡世の者の術なり。予は渡世のためにせねば、秘事口訣はならはず。習はれば何ぞ秘せん。五倫五常は外に師あり。狐狸の筆に迷はされて、俳諧に混すべからず。

と、秘事傳授は、渡世の者の術なり。師はたゞしばらく東西を指すのみ。我

と一理を知るにあらざれば、万端に渡りて、物皆明かならずとは、實に也有が俳諧に於ける根本の見地なりき。さればこそ翁は元より定まりたる師をも求めず、又、好んで人の師たらんともせざりしなれ。

あゝ、酒々として俗化し來れる當時の俳諧が、徒に法式に拘はり、門派に泥める間に、超然獨特の見を以て、よく時俗の弊風を破却し、已が思ふまゝ感ずるまゝの風雅を探りて、悠々天外に逍遙せる也有が眼識、おにそれ、偉ならずや。ざるを徒に翁が俳系を論じ、師匠を尋ねて臆断を逞くするがどときは、偶々以てこの滑稽的老爺が、地下の一笑を招くに過ぎざらんのみ。

也有の俳諧は天才にして、門派もなければ、師匠もなし。誠に翁は、翁が滑稽洒落なる先天的詩想を以て、獨特の俳諧を詠出したるものなり。今しばらく吾人をして翁が俳諧に於ける獨歩の見解を伺はしめよ。



翁が曉台一派の俳哲事紅に答へたる文に(びなほむす)

いかほど雅語麗言を御使ひ候とて、根が俗談の俳諧に、馬子の、摺小木のさ申すことは、やさしからず候、それをかきませて、我がせが風つぶすの、妹が禰洗ふのと申し候ては、何とやら不都合に聞申候。耳の齧とは、打ち平みたるの、牡丹餅とは咽につまるのと、卑賤の物を搦み捨つる様になり行き候ては、一切萬事を捨てぬ爲めの俳諧の体は無くなり申すべく候。然らば、俳諧には雅言を御使ひなされ候様は、御諫め申す候。根が俳諧を御捨て成されて、御好の雅趣專一の連歌に御樂みなされ候へと、御す、め申し候事にて御座候。足下や、愚者は渡世俳諧と述ひ、どうも成る事に御座候、よけれたる古衣にまとはれ蚤虱を取盡さんと骨折るより、さつぱりと脱ぎかへ候にはいか。紫の米を奪ふたさへにて、連歌あは交は、連歌師よりは甚だ惜む事にて御座候。翁も中ころは、しばし句意句作に媚を求められたるを四十余年の非を知りて、全く世俗の平生に改め、飾らぬ所を正風と定められたるを存し候。流行さば申しながら、根本の至善に止まる所は、古今一貫に有るべく存し候。愚者も昔は和歌の門人となりて、及ばぬ敷島の土をふみ。十年ばかり腰折を讀み習ひ申し候が、老師下世の後、然るべき師もなく、畢竟楊才の成りがたきを悟り、さんさ俳諧に慰む身となり申し候。然れば、俳諧にぬめりを交へて使ひしは、昨日喰ひあきたる餅の砂糖を殘して今日も蕎麥切にかけて喰ふやうにて不氣味に覺え申し候。

と、之によりて也有が俳諧につきての見解は、はゞ知ることとをうべし。蓋

し翁は、當時の曉台一派の徒が、一向俳諧を優麗高雅ならしめんとし、徒に雅言麗語を飾りて、句意句作に媚を求むるを見て、これ決して俳諧の真髓を得たるものにあらず。俳諧は日常の俗談平語を捕へ來りて、風雅にして、しかも野卑ならざるやう、をかしくいひなすべきものにこそと斷じたるがごとし、されば、翁が俳諧は誠に通俗的にして、俗談平語を何の苦もなく使ひこなし、剩へ翁が天賦の滑稽的奇才を調和したれば、讀みてをかしく聞きておもしろく、飄逸洒落の餘情言外に溢れて、まゝ人の願を解くものあるを見る。

今その例證として、翁が俳句數吟をあげん。

○ 珍らしく蚤の喰ふ夜や春の雨



初午や禰宜に化けたる庄屋殿

○ 行春や花によどれし荷ひ茶屋

○ 卯の花や手で追ふ程の蚊の夕

○ 骨折をくべて木挽の蚊遣かな

○ 雨乞をした顔もせず月見かな

○ 時雨るゝや乞食と二人松の蔭

○ 蟬あつし松さらばやと思ふ迄

○ 蚊時ならさぞ来て鳴かん涅槃像

○ 覺書して捨てられぬ扇かな

以上の數句は、たゞ僅に己が心になかへるものゝ一端を摘出したるにすぎざれども、也有が句柄と、風調とは、これらによりて、大略推知せらるべし。もしそれ「畫顔やどちらの露も間に合はず」松風の里とこまでを門飾等の名吟にいたりては、早くより人口に膾炙する處吾人の贅言を要せざるべし。要するに、也有が俳諧の妙處は滑稽にして、しかも卑陋に墮ちず、洒落にして、しかも幽致を損せざるにあり、而して、その最も也有獨特の長所に



して、幾多の俳哲が、遂に翁を凌駕すること能はざりし所以は、翁が目さどくも卑近なる俗事の妙を捕へ來りて、おもしるくいひ流し、しかも決して卑野猥雜にまで陥れしめざるにありといふべし。あゝ、かくの如きは、誠に滑稽洒落、翁がごとき天賦の特性を備へたるものにあらざれば、到底學び得べき所にあらざるなり。翁もまた獨歩の詞豪なるかな。

#### 第四章 也有が俳文

也有が飄逸洒落なる詩想は、たゞに當時の俗陋なる俳壇を壓して、超然獨歩の地位を作りたるのみならず、その馮くがごとき滑稽と溢るゝばかりなる雅懐とは、又俳文の上に於いても變幻自在の妙を極めたりき。その恬淡洒落なる詩想と、奇警詼諧なる筆鋒とは、忽にして典麗雅致、銀盤に玉をまろばすがごとき美妙ある細筆となり、忽にして滑稽妙絶、鬼

神も頤を解くがごとき、壯快ある放語となり、滾々として絶えざること、泉の如く滔乎として滯らざること、奔湍のごとし、一氣呵成の妙變化自在の智、これ實に翁が俳文に於ける獨特の長處にして、何人もまた比擬すること能はざる所なり。誠に翁の俳文は、千古の逸品にして、吾が國の文學史上、この種の文壇に於いては、獨擅にして比類なしといひつべし。これ實に吾人が俳諧者として、也有を賞揚せんよりは、寧ろ俳文界に於ける獨歩の詞豪として、翁を追慕する所以なり。

翁が著書鶉衣は、則ち翁が俳文を集録せるものなるが、その言辭の輕妙にして、着眼の奇拔なる、眼のあたり翁を見るがごとき、一度巻を開かば、又覆ふことを知らざるべし。吾人はかゝる絶妙なる逸品の一端なりとも、せめては讀者に紹介せんものをも、鶉衣の中より、最も佳絶にして、輕妙なるもの數十章を摘録し、本書の附録となしたれば、必ず一讀の勞を



賜はれかし。再讀、三讀は讀者よりこそ進んで之をなすならめ。  
 さはいへ、本書附録にをさめたるもの、必ずしも金玉の作なりとはあ  
 らず。たゞ僅に翁が洒落ある心泉より迸りたる詞沫の一端をあげたる  
 のみ。されど、也有が俳文の妙は、蓋しこれらに因りて、その全豹をうか  
 ひうべきか。誠に翁の俳文は、滑稽奇才の想と、洒落脱俗の筆とによつて、  
 變幻自在の妙を顯し、常に人智の異表に出で、讀者をして大笑解頤せ  
 しむるにありき。也有が俳文の妙處は、全くこれにあり。然れども、也有は  
 決して滑稽談話をもて俳文の主髓なりと信じたるものにあらず。たゞ  
 翁が天賦の奇才妙想が、偶々以てその俳文の上に溢出して、遂にこの文  
 壇の大觀をなせるのみ。しばらく左に抄出せる六林文集の序に公言せ  
 し翁が俳文に於ける所論をきけ。

世の俳人、ともかうも五七五はいふべし。たゞ俳諧の文章は難し。風俗文選、世に行はれて後、その體を學

ぶ者のまゝあるも。よくいふものは甚稀なり、古人の文とてもその風體一ならず。祖翁の筆を評するは、い  
 とちたきわざなれど、ひそかに之をいふべくは、やんごとなき人の編笠羽織にやつして、花の本の床几に  
 よりたれど、田樂團子に手をふれず。茶ばかり飲んでやすらひたるがごとし。その位にいたらぬ人の及ぶ事  
 や。たからん。東花房支考が文は、働きてせまらず。おもしくいひなぐりて、情を深く含ませたり。たと  
 へば、諸藝に勝れたる當世男の一座の興に三線とりて、相の手ばかり引き捨てたるがごとし。彦根の許六は、  
 物の姿情をよくいひて、詞を飾るにおくれたれば、や、卑しきに似たれども、さりさて、雅趣のなきにあら  
 ず。たとへば何がしの愚右衛門など、人に顔よく見知られて、駒下駄に、尺八吹きて、大道に肩いからし、  
 あはれ、傍に人なきがごとしといはん。その餘餘々たるは論に及ばず。たゞ和漢の故事古語を知り俗の諺に  
 も入りわたり、その影を用ひて、あらはならず。長きを縮め、堅きをこなし、俗ならず、雅にすぎず。主  
 意よくもと末を貫きたるをこそ調ひたる文章とはいはれぬ。誠にたからさらめやは。

長きを縮め、堅きをこなし、俗ならず。雅にすぎず。主意よくもどす。るを  
 貫きたるをこそ調ひたる文章とはいはれぬ。これ實に也有が俳文に於け  
 る、定説にして、その徒に高古典例に走るをにくむと、同時に又、卑俗猥雜  
 に流るゝをきらひしこと、翁が俳諧に於ける見解と、少しも異なるなし。



翁が芭蕉の文を評して、俗中雅を失はず、その位に至らぬ人の及ぶ事か  
たからんといへるを見て、全く世俗の或者は、たゞに言辭の高雅をの  
み競うて、愈々時俗の風趣に遠ざかり、又、或者は徒に卑俗の猥談にのみ  
馳せて、ますます風雅の眞味を失へるを深く痛歎せられたりしを知る  
べし。

かくのごとく、也、有の俳文に於ける見解は、雅に過ぎず、俗に流れざるに  
ありきといへども、翁が性來の滑稽的詩想は、その奔放自在なる健筆に  
驅られて、やゝもすれば、幽玄韻致なる俳諧の雅趣をはなれて、まゝ、輕跳  
卑俗の談話に走り過ぎたるがごとき傾あるを見る。然れども、翁が獨特  
の妙趣は、畢竟この滑稽洒落の奇才にあることなれば、たとへ少しく風  
流高雅の趣味を脱したるがごとき小疵ありといへども、決して咎むる  
に足らざるなり。況んや、翁が風流韻事は、己が性來の嗜好にして、元より

世の渡世俳諧者流のごとく、之に依りて口を糊し、家を立つるがごとき  
もの。同日に談すべきにあらざるをや。

翁かつて送月堂文樵にかたりていはく、

予は、もと本藩世臣の家に生れて、業とするは武事なり。幸に治世に遇うて、武の餘り、官の暇に、この狂  
句を好み、今は老の世を過れて、この一癖のみ友とすれども、我が家のことにあらば、毀も家の辱ならず。  
たとへ譽も身の榮とせず。何の故にぞ、淺を深めて、人にゆかしからん。よくばよかるべし。あしくばあ  
しがるべし。物あらはにして虚名を退がるべきは。これもいさゝか健伴からずや。

と、我が家のことにあらねば、毀譽榮辱も何かあらん、よくばよかるべく、  
あしくばあしがるべしと、これ明かに翁が平常の素志を表はしたるも  
の。にして、翁は露ばかりも俳諧師を以て、一世を鼓盪せしめんとするが  
ごとき抱負を有せしもの。にあらず、翁の俳諧は、翁がたい日ごろの心ず  
さびなるのみ、誠に翁の俳諧は樂みにせるものなり。變さはらしにせる  
ものなり。門戸を張り、子弟を集めて文壇に覇を争はんとするが如き渡



世俳諧は翁の深く卑しむ處なりしあり。さればまゝ翁の詞藻を蒸うて、風雅の道をたづねらるゝものもあれば、翁はまづ之を諫めていはく、俳諧は樂しみになすべし。憂さ晴しになすべし。耽るべからず。ねぼるべからずと、紺屋巴良に號を興ふる説に、

和歌には神も世に慕はるゝ昔男の昔をきけば、芥川のかけ落に仇名の髪を切られ、詩賦に秀でし唐人は、酒屋にかけのたまりて、朝三暮四の焼餅さへ乏しかりしためし多し。こゝにしれや。風雅必ずしも身を修むる助となり。道は外に學ぶべし。文章元より富を來たさず。家業に思ひかふべからず。(中略)産を破り、家を汚りて、頭陀草鞋の先蹤をよき事として、之を慕はば傾城買も、博奕打も、同じつらなる俳諧なるべし。或は、また、身持よく、家業をば見る者ことに必ずいはむ。俳諧はめでたきものなり。説ぶに妨なしと、さらば俳諧に第一の奉公となりて、三神の冥慮に叶ひ、夷大黒も風雅を助けて、遂に俳諧の妙處にも至るべし。

又横須賀なる桶屋を業とせる先以に示す辭に

風雅を以て家業を妨ぐべからず。家業を以て風雅は妨ぐべし。せむもりの日の俳諧にして、障るもその日の俳諧なり。この事五論によくいへり。あはで止みにし憂さを思ひ、仇なる契をかこつたこそ色好まむとはいはれど、高く論すれば戀すらかくのこさし。まして俳諧に於いてをや。

と、家業を以て風雅は妨ぐべし。風雅を以て家業を妨ぐべからず。風雅必ずしも身を修むる助とならず。文章元より富を來たさずとは、實に翁が俳諧に對する持論にして、世の徒に風流韻事に耽りて、正業を顧みず。高潔自ら任して、やせ我慢なる清貧に安んじ、一生をこゝに誤るものを深く痛惜せられたるは、なればよしや、翁は俳諧を以て世に知らるるも、之れ元より性來の嗜好にして、老後の閑居いよくその道をたどるに便ならしめたるにあるのみ。之を以て、名を立て、世にうたはれんとは夢だにも思はざりしことなり。さればその俳文のこゝさも、たい折ふしの興にふれ、筆にまかせて、己が雅懷を漏したるまでにて、之を以て、俳文の法式となすべし。かくして、俳文は作るべしなどいふがこゝさ、師範的の考慮は、露ばかりもなかりしものなれば、徒に偏狹なる見を以て、翁の俳文を是非するがこゝさは、愚のいたりと、いふべし。



鶉衣前後續遺、合せて四篇十三冊、何れとして絶妙ならざるはなし。されば、一度この書の世に喧傳せらるゝや、また文選、文操を説くものなく、天下の俳人相競うて一に皆軌範をこれにとれり。こゝに於いて、也有の俳文は遂に一の模範法式のごとくなりて、廣く世人に珍重せらるゝに至りぬ。  
あゝ、この奇才、この雅懷、到底俳諧を以て口を糊し、世を渡るがごとき俗輩の企て及ぶべきどころにあらざるなり。

### 第五章 逸事遺文

吾人が也有につきていはんと欲せしところは、己に盡きぬ。元より翁が性行と文詞とにつきて、片言隻語たも敢へて遺漏なからしめんとせば、猶贅言蕪辭を費すべきふし多かるべきも、これ徒に讀者の倦厭を招く

のみにて、也有が眞價を知るには、何の益する所もなければ、殊更にその雜逸なる冗言は勉めて省畧することとはなしぬ。されど、なほおのづからいひ漏しもし、書き残しもしたることなきにもあらねば、いさゝかこゝにその遺漏を補ひてむ。

#### (一) 也有が雅号

也有初名は辰之丞、又は市郎平といひ、通稱孫右衛門、字は伯懷、名は時般、或は並明と稱す。その先が北條氏なるより、詩集おとには北並明と書す。順寧、蘿隱はその号にして、知雨亭、半掃庵はその舍号なり。知雨の二字は、巢居知風、穴居知雨の語よりとり、半掃の名は、我が物ぐさの明け暮れ掃く日よりは、掃かぬ日多く、床は塵、庭は落葉に任せがちなる庵のだゝくさをいふなりけり。と、和歌には暮水と稱し、狂句には螻丸とよぶ。而して、也有とは實に俳諧の上にての雅名なりき。初は野有と書きしを見れば、



その祖父野双翁が俳名の頭字をやつぎたりけむ。さらば、こもまた翁が深く祖父の雅量を追慕せし一端とやいはまし。その他、紫紅、永言齋、蘆狂庵、半谷居、紫隠里等の名もありきといふ。

(二) 也有が著書

○鶉衣前、後、續、遺、四卷十二冊 也有が俳文を集めたるものにて、同時に出版せざりしを以て、かく前編、後編、續編、拾遺の四篇に分れたり。あやしく榮もなく、きれくをあつめつゝりたるを鶉衣とはいふなり。げにそのうづらならば、たい深草のふかくかくろひて、かりにも人にはしらるまじきものこそといはれたる也。有が自序によりて、やがて、その名の意もしらるべし。

○小華籠卷一 年少男女の道語的訓誡を作物語にことよせて、翁が得意の綺言戯語を以て、面白くつゝりなしたる小品なり。これ等も、また、也有が

長篇の俳文と見て差支なかるべきか。

○野夫談卷一 田夫野人の雑談にしなして、春臺が赤穂義士論を手ひどく反駁せられしもの、文章輕妙にして翁が赤誠紙背を照す。

○蘿葉集卷三 也有が俳句を集録せるものにて、明和三年九月、也有が存生中に印行せられたりしが、後逸板せしを、天明二年中、書林風月堂の力に依りて再刻せられたり。その時送月堂文樵が、本篇以後の句を集めたる蘿の落葉一、卷を添へて上梓せられたり。

○峨洋篇卷一 也有と、六林との和漢聯句の一小篇なり。未足齋の序文によれば、明和六年中の詠なるがごとし。

○みなむすび卷一 事紅と、也有との俳諧問答にして、也有が俳論これによりて詳かなり。安永四年のことなりしよし、その書簡の日附にて知らる。

○白話傳難陳卷一 美濃派の童平が、同派の達支の聯句を批評せられたる



を、也有が難陳せられしものなり。

以上は刊本、又は寫本にて稀に世に流布せるを、先年博文館にて俳諧文庫の中に悉く収められたれば、今は何人も容易に翁が奇警なる詞藻をうかいふことを得べし。

その他、鶉衣、續編の序によれば、文には管見草、短硬錄、永代藏、無夜食談、詩集には、蘿隱編、和歌の集には、蘿窓集、狂歌の集には行々子、又俳諧の集には、千句集、五百句集、蟻塚集、もり桶、漢和聯句集等ありと記されたれども、吾人は未だこれ等の遺稿に觸れざれば、そのいかなる著作なりやを詳かにし難し。也有が俳弟文樵が、翁の滅後、追善として刊行せられたる俳諧夢之蹤の中に、僅に蘿隱篇、蘿窓集、行々子等の端切をうかいひ知れるのみ。

(三) 也有が詩歌、

多藝多能なる也有は、たゞに俳句、俳文に於いて絶妙なる手腕を振ひたるのみならず、詩歌、狂句等何れも堪能の譽ありき。今その一二を左に摘記せん。

○詩

訪三止幽居

張北山林遠府城、相逢多日雅談清。秋深老樹添霜色、夜靜流泉疑雨聲。驛馬稀傳都下信、啼猿常動客中情。纔看隣店商家在、豈比塵衢爭利名。

初夏郊外

長江沒落日、漁艇去無痕。酒店知何處、炊烟起暮煙。涼風搖麥浪、翠嶺入晴湖。夕霧乍無賴、氤氳掩畫圖。



新年書懷

春回蓬左舊林垌。閩里晨鷄支枕聽。扶病老妻頭共白。訪閑農父眼常青。庭梅瘦有清貧趣。山雪晴如宿醉醒。翰墨場中誰識我。惺然徒至樂天齡。

同

居與農家隔短墻。素餐老隱又迎陽。十人唱和名空在。一世悲歎夢已長。片雪小林餘臘色。早梅古渡帶晨光。衰來謝屐今無用。但待池塘草日勞。

送年

萬木蕭條曆日遷。草堂晝靜就爐眠。春前梅早東南地。雪後山連西北天。弘景畫牛誰不信。塞翁失馬物皆然。官途舊識咸辭世。獨媿老殘猶送年。

偶成

少年幾處逐芳塵。暹日甘眠物外身。乳燕入梁知舊主。嬌鶯窺窓笑閑人。古方無効常憂病。新菜有餐何厭貧。不恠東風吹鶴髮。已投書劍入逢春。

即事

郊村四月綠成陰。陌上人稀落日沈。春興回首既陳迹。衰年無物不傷心。午夢驚回日未斜。柴門無客坐烹茶。聲々忽散林間鳥。應是鄰兒來折花。草堂五月日如年。樹底鳴鳩呼懶眠。雨歇暮村遙在目。孤煙一抹與雲連。

蘿薛門深絕送迎。梅天風動雨纔晴。午眠自覺猶憑枕。時聽隣家春麥



聲  
梅霖天冷未更衣。夜色霽々燈影微。獨坐開窓何所見。兩三螢火隔牆飛。

五老會

紅爐坐上似春回。五老交歡屢舉杯。莫道無由得仙骨。城南本是接蓬萊。

九日

幽樓菊發值佳辰。一歲秋光餘二旬。桑葉半飛村酒熟。賞遊何待白衣人。

○和歌

掛橋朝霞

朝日かげにほへる峯はなほはれで

谷よりかすむ木曾のかけはし

徳恩晚鐘

遠近はきゝもさだめず山かせの

さそふまゝなる入あひのかね

深雪

ふみ分けんほどこそあらめ訪ふ人も

またれぬばかりつもる白雪

獨述懷

誰か知るうき身を思ふひとり寐の

まくらにかゝる老のなみだを

郭公何方



一こゑの雲路やいづこゆふくれの  
月もをくらの山はどゝぎす

○狂歌

人のもとより菊に酒をへて下露に齡を延ぶとさくの酒さ  
げて君が千代を祝はんといひこしけるに。  
われは下戸百代でたりぬ菊の酒

のこる九百は亭主おつもり

孟宗の書に

孝行は人にとられてなさけなや

親にわかるゝゆきの竹の子

歳暮に

ゆたかなる代に住みながら煤掃の

けふに身ひとつあき所なき

老の身を思ひて

世の事をさかじくとせし耳も

遠うなれどはいのらざりしに

折々短冊を請ひける人に

またも書け又もかけにはあきは山

短冊坊の名にや呼ばれむ

(四) 也有が俳席の掟

一飯は三石の掟を守るべし。

茶の花のころを奈良茶のさかりかな

一汁一ツ菜一ツ酒の肴も一ツに限りて、鯉に精進の咎をのがるべし夏



は必ず茄子を用ひ、豆腐は三季にわたるべし。香のものは論するに足らず。

一酒は膳の前後をすべて、三盃を過ぐべからず。さるから、盃は得道具をゆるすべし。

いかさまに四度はくどし村時雨

連衆に酒すきありて、この條の掟に甚だくるしむ。よつて、了簡の一句をしめす。

狐さへ五こんどどもる霜夜かな

一菓子はその日のあるに任す。まづは煎豆に定むべし。

煎豆に音こさませせてあられかな

一燈は行灯にて事足りぬべし。

蠟燭は立つといふ名の寒さかな

右の條々けふよりかたく守るべし。亭主に卑下の辭なければ、客に輕薄の挨拶も古し。この約束を空になして、厚味を求むる輩あらば、後の世に生れて風雅に不信第一の人となるべし。

元文三年

誓文はたてぬ筈なり神無月

同追加

一袴を取るに辭義あるまじきこと。

一夜更けて時を問ふべからざるごと。

但し、勝手の躰におどろくべからず。

一世間ばなしにわやつく人は、例へ王衍が塵尾を揮ふとも、濫園の居ねふりには劣るべし。

右先達ての定にもれたるを拾うて、菴の新制とす。飲食もどより亭主の



了簡なれば、客の心得に及ぶべからず。且は、いひわけに似たらんも口惜し。そも奈良茶には限るべからず。奈良茶の奈良茶なる心を守らば、菜飯も、麥飯も、則ち三石の内と知るべし。  
以上は翁が俳席の掟なり。これ又、以て翁が平生の洒落を見るに足るべし。

附録鶉衣(菝萃)

○摺鉢傳

備前の國にひとりの少女あり、あまさかる鄙の生れながら、姿は名高き富士の俤にかよひて、片山里に朽ちはてん身をうさものにや思ひそみけん。馬舟の便につけて、遠く都の市中に出で、しるよしある店先に、しばしたつきをもとめけるに、師走の空いそがしく、木の葉を風のさそひ盡す比は、世も煤掃の古きをすて、物みな新器を求るにつれて、ある臺所によき口ありて、宮仕の極がてら摺木と聞えしもとにうら合せの夫婦とはなりけり。かれは柏木の左衛門にも似ず、松木のあらくましき男ふりながら、少しもかざりなき氣だてのまめやかなれば、女も心に蓋もなく、明暮いそがしき務も、おちこ心に働きて、どろ、白あへの雪いたゞくま



で、糊米のはなれぬ中をねがひ、水もらさじとは契りけるに、その比せつ刷かひといひし男は、檜のきの木目細かに、その姿やさしきから、昔は御所にうぐひすの名にも呼ばれしが、おなじつとめの夜ふくる時は、走水の下の轉び寐がちなるを、よそのいがきの目にもれしより、さらでも住うき傍輩の中に、はしたなき間、鍋の口さし出、杓子の曲り心より、うき名は立ちそめ、炮烙さへ仲ま破れして、あけくれ茶釜にふすべられ、なら坂やわさびおろしのふた面、ともかくにもたゝすむかたなく、身をあへ物の顔よこれぬれば、買臣が妻の耻をいだき、手ならひの君の昔を思ひ、遂には土にかへるべき無常をや観じけむ。ある夜鼠のあるくまぎれに、柵の端より身を投げるにぞ、顔かたちかけ損じ、見にくきまでの姿にはなりける。かくては食物のつとめ叶はじとて、あるじの怒甚しく、石漆の妙薬にも及はず。妹脊の中も引わかれ、内庭まで下られたれども、猶さみだ

れの折々は、雨もりの役につらなれば、いと、長門の涙かはく隙なく、ここにもすはりあしくなりて、井戸端にころがり出で、蓼萍に埋れて後はたれ哀とふ人もなかりしに、ほごなく露霜も置うつり、壁の虫の音もかれゆく比ならん。間ちかき寺の門番にひろはれ、再び部屋にかくまはれながら、ならぬ火鉢にさまをかへ、酒をあたゝめ、茶を煎して、今年はこのにうさを忍びしに、やゝ春雨に梅も散りて、ささらぎの灸もすめば、また、灰をさへ打あけられ、唐がらしといへるものを植ゑられしが、からさ目ながら、さてあらばあるべきを、それさへ秋のいろみ過ぎつゝ、遂に橋づめの塵塚によこれ伏し、果はさがなき童部のまゝ、ごとにくだかれ、行衛もしらぬ闇の夜の礎とはなりけりぞぞ。

○木履説

木履々々、笠は東坡が春の野かけの尻にしかるゝ折もあるべきに、など



や、汝は夏の日の宰予が枕にも雇はれざる。日和つゝきて隙なる時は、様  
の下に寐ころび、蚕の霜夜にともなひ、又は、座頭の杖にさゝれて、日待の  
壁にぶらつきては、傾くまでの月をも見るらむ。偶々、輕業の繩渡りには  
かれて、高みに人を見下すこともあれど、常は沓ぬぎにひさまづき、洗濯  
の日の腰掛となりて、それより上の交はしらす。かく下さまのものなが  
ら、狩人の笛となりては、口にふかるゝためしもありとかや。その鹿の命  
を断るは、罪深き身の果なれど、佛も下駄もあなし木の切と、例の一体の  
しめしに逢ひて、始めて輪廻の鼻緒はされてん。そもく、足高きものを  
木履足駄と號し、たけ低さを下駄といへるは、いづれ一躰分身にして、こ  
こに尊卑の差別はあらねど、俳諧の上に二の姿を論すべくは、ばくりと  
と静なるは、雪降の朝にして、下駄々々といそがしきは、村雨の夕なる  
べし。

## ○朝寐辭

神儒佛の教さまく、なる中に、上はかしこき朝まつりことより、下は十  
露盤のせはしき世渡り市の出買のその身過まで、朝寐せよとの教こそ  
なけれ。まして雞はじめて鳴いてより、忠信は蚊にせゝらてたばこに明  
けゆく鐘をかぞふとや。げにも唐帝の玉妃に腰うたせて、飯時もわすれ  
給ひたらむ。又は、若むすこの色酒にあそび過して、胸ふくれ、頭おもくて、  
いつも朝かほの花をしらす。萬事は手代まかせならんは、身代破滅のは  
じまりなるべし。さはれ、世にする事なき姑の佛なぶりの朝起に、おも屋  
の家内にそしられたらむより、これらは火燧に火を起す間をうち寐か  
へりてもあれかし。されば、用をかきても寐よどにはあらねど、三四月  
の短夜に枕加減のよき比は、朝寐こそ又おかしけれ。必ず目のさめぬに  
もあらねど、うつらくと夢見夢みず、花に朝日のはひたるも、松に有



明の残りたらむも、かのねやながら思へるは、起きてみるにもまさるべ  
 けれ。いつもの豆腐うりの聲行過ぎて、車井の走りしたと、雀の餌はみに  
 あつまり鳴くなど、幽閑の情にたへぬ折しも、けうとき物申の聲に胸つ  
 ふれて、雨戸一本おしあけたれば、空は四つ比にもたけ過ぎて、さし心得  
 たるわらはのくみ置きたる手水湯は、名ごりなくさめきりて、その奉公  
 の水になるもかはゆし。されば、かしてげに朝起して、一日目のさめがた  
 く、晝寐に、光陰を盗まむより、枕序に、朝寐たるころ、ましならめど、さど  
 て、此、睡工、夫を、なす、事になむ、有ける、さはいへ、秋の、夜長になりて、又、朝、起  
 の、面、白、き、時、は、た、ち、ま、ち、朝、起、の、男、と、呼、ば、る、べ、け、れ、ば、釋、迦、も、孔、子、も、し、ば  
 し。氣長にみゆるし給ふべし。

聲を夜にして聞くあさ寐かな

○鼻 箴

しのぶの浦のみる目はもとより、耳とも、口ともつゞけたらむ歌にも、さ  
 のみけやけからず。いかなれば鼻といふ名のひとへに俳諧にはとゞま  
 りぬらむ。未摘花のわる口もあからさまにはよみなし給はず。そのおか  
 しみこそ俳諧にはうれしけれ。さりとして、臍の尻のどて、いやしむたぐひ  
 の物にもあらず。そも猿田彦の御鼻は、神代一番の見事さにて、愛宕高雄  
 の天狗達も自慢は鼻にあらはれながら、杉の木の間、露霜のおきとこ  
 ろなくて、いかに寒からむ。見よや、人の老ゆけば、目は遠山の霞たな引き、  
 耳には鳥虫の聲もうとく、口は冬がれの齒も落ちて、盛衰まのあたりか  
 なしみを催す。たとへ百年のつくも髪だに、鼻ばかりはかけもやらず。つ  
 ぶれて用をかく事もなし。ひとり常盤の操を守りて、時しらぬ山とも稱  
 すべけむ。されば、れそるべき人心、むかし聖賢のおしへにも、視聽言動の  
 四つばかりをあげて、鼻に警のゆるかせなるより、世にれごりのさざし



起りて、籠にはこる妾小姓のねほくは、主を鼻にかけて、心にあはぬ傍輩をも鼻にあしらふ高ぶりより、すでに鼻つくあやまちも仕出しぬる。なならぬかはりにひかれよる、色のいましめは猶さらにして、女によれる髪筋には、鼻の高き大象もつなぐれ、あはうの延ばせる鼻毛には、蜻蛉もつらるゝためし、わざはひ蕭牆より起るときけば、つゝしむべきは鼻のさきなるべし。

○借物の辯

久かたの月だに日の光をかりて照れば、露また月の光をかりてつらぬきとめぬ玉どもちるなり。むかし、何某のみことの、このかみのつりばりをかり給ひしより、まして人代に及んで、一切の道具を借るに、借すものもたがひなれど、砥の、挽臼のといへるたぐひは、借すたびに脊ひきく、鯉ぶしは、かりられて瘦せてもどるこそあはれなれ、金銀ばかりは徳つさ

て戻れば、もどかる事のかたきにはあらぬを、かへす事のかたきより、今は借る事だにたやすからず、むかし男ありて、身代もならの京春日の里にかす人ありて、かりにいにけるより、やことなき雲の上人もかりにたにやは、君は來さらんと露ふか草のふか入し給へば、鬼のやうなる武士も、霜月比よりは地藏顔して、人にたのひのかりがねは、尾羽うちからして、春來てもこし地にかへらず、かりの宿りに心とむなど、人をだにいさひる出家達も、借らでは現世の立がたきにや、二季の臺所には、掛乞の衆生來りて、色衣の長老これが爲におがみ給へば、又、ある寺には有徳の知識ありて、これはこちから借しつけて、さりの算用滞れば、貧なる檀方を呵責し給ふ、かれも、これも、どもに佛の御心にはたがふらむとぞ覺ゆる。そも顔子は陋巷にありて、いかきのめし、瓢箪の酒に貧の樂をあらためずとや、さるを今世の人と借金、の山なして、是を苦にすれば限なし。百ま



でいさぬ身を持ちて、さのみは心を悲しめむや。一寸さきはやみの世ぞ  
 ど、放言に腹うちたゝきて、家は貧に安んじたりなど、おなじ貧樂の引こ  
 どにいふは、やるせなき心のはらへならめど、まことは雲水の間違なり。  
 なべて世にある人の衣服調度をはじめて、人なみならねば耻づかしと  
 て、そのためにかねをかりて、世上の耻はつくらふらめど、人の物をかり  
 てかへさぬを耻と思はざるは、たゞ傾城の客にひかひて、飯くふ口もど  
 を耻かしがれど、うそつく口は耻ざるにおなじ。かくいへる我も借らぬ  
 にてはなし。かす人だにあらば、誰とてもかりのうき世に金銀道具はい  
 ふに及はず。かり親、かり養子も勝手次第にて、女房ばかりはかりひきの  
 ならぬ世のおきてこそ有がたきためしなれ。

かる人の手によこれけり金銀花

○物忘翁傳

わすれ草生ふる住よしのあたりに住わびたる物忘の翁あり。さるは、健  
 忘などいへる病の筋にはあらで、只身のおろかに生れつきて、物覺のお  
 ろそかなるにぞありける。昔は經學の道をもとひき、作文、和歌の席な  
 どにもさそふ人あれば、まじらいけれど、さく事、習ふ事のさすむに面白  
 しと思ふ物から、夕べに覺えしことくも、朝ぼらけにはこぎ行舟の道  
 なくて、身にも、心にも、のこる事すくなし。されば、是を書き付け置かむと、  
 しひて硯ならし、机によれば、春の日はてう鳥に心浮れて過ぎ、秋の夜は  
 虫なきていとねふたし。かくてぞ老會の森の草、かりそめの人の約束も、  
 小指を結び、手のひらにしるしても、行水の數かくはかなさ、人もわらひ  
 ても罪ゆるしつべし。さればその翁のいへりける、身のとり所なきを思  
 ふに、若きにかすまへられしほどは、人やりならずはづかしかりしが、つ  
 んばうの雷にさはがす。座當の蛇におどろかざるこぼれ幸なきにもあ



らすよのつねさゝわたる茶のみがたりをはじめ聞ける事の耳にのこ  
らねば世に板かへしといふ咄ありてまたかの例の大坂陣かど若き人  
々はつきしろひて小便にもたつか中にも我は何がし僧正のほどゝぎ  
すならねどさくたびにめづらしければげにとさくかひある翁かなど  
かたる人は心ゆきても思ふべし。ましてつねく手馴古せし文章物が  
たりの双紙も去年見しことはことし覺えず。春よみしふみは秋たどた  
どしく又もくりかへしみる時は只あらたなる文にむかふ心地してあ  
かず幾たびも面白ければわつか雨三峽の書籍ありて心のたのしみさ  
らに盡くることなし。ひかし炎天に腹を晒したる男は人にも折々物を  
問はれて取りまがはしいひたるべしといかにかしましき心かしけん。  
今はなかく嬉しき物忘かなどぞいひける。なほかの翁が家の梁に何  
の本歌をかとりけるあらむ。

わすれてはうちなげかるゝ夕べかなど

物れぼほよき人はいひしか

○剃髮辯

すべて天地の間、その理ありて、姿あるべく、すがたありて、後名はあるべ  
しいでや、世をのがれて、うき世の名をあらためんには、その姿まづあら  
ざらむや。今やさかやきの世間をやめては、神儒の束髪にや似せん。釋氏  
の剃髪にやならはんと、模稜の手に思へるも、かりそめながら生涯の仕  
上なれば、一大事の分別にはありけり。さるも、心にまなふ事なく、かの三  
教のよしあしもわかたねば、只あけくれの自由を思ふに、かれは夏あつ  
く、これは冬寒し。げに揚州の鶴はわたまにだになかりけり。これを吉田  
の法師にとへば、冬はいかなる所にもすまる。あつき頃わるき住居はた  
へがたしとぞ。是こそ此爲の師ありけれ。誠に頭巾といふものあらざら



ひや、手水行水にさはるものなく、襟に垢しみず、枕に油つかざらむは、心も共に清かるべし。夏をひねどこそと思ひ定めて、遂に剃るにはきはまりぬ。されば遍昭がよみけんたらちねも、今は世におはさねども、官路の險難をしのぎ盡し、功こそならね、名こそとけね、譽なきは耻なきにかへて、今此老の身退き、浮世の塵を剃りすつべきは、いかで嬉しとればさいらんや、かゝれとてこそ撫で給ひけめと、こゝにうたがふ心もなし、されども、儒者の顔付をうかゝへば、あまり機嫌のよからぬは、父母の遺體をどの咎めなるへし。さるは、一朝の怒に喧嘩を起し、二世の契に心中をくはだて、我どわが身を愛せざる無分別をするなどの道理にさどす教なるべし。それを理屈の十露盤にかけて、分厘までをはじき詰むれば、爪も剪みがたく、髭もぬきがたく、鼻毛も、蜻蛉のうき名をつなぎて、かへつて親をもとづかしめぬべし。その上、わが双親世にましまし、時、老後は共

に剃髮の望もればせしかども、その世にいさゝか障る事ありて、いまだ心に任せ給はざりし事、我よくこれをしる。故に、かつはかの遺體を以て、寸志を繼ぐともいはゝいふべし。うもまた、釋門に此姿の始る事、深き心はいさしらねども、先はうき世のかざりともなれば、これも煩惱の端ぞと拂ひすて、もつばら色のふせぎにもやあらむ。されども、今は醫者も連歌師も剃こぼして、妻帯はあたまにしもよらず。まして妻こもれる武藏野の八貫町には、四部の御弟子の比丘尼をあつめて、比丘も、優婆塞も入交れば、頭巾は紫の色ならぬと、吉原の朱をも奪んとす。しかれば、佛もあたまばかりの目利にて、御弟子帳には書きのせ給ふまじ。ましてわがあたま、道にいらねば入道ともいひがたく、人を教へねば法師にもあらず。禪門でもあし。坊主にてもなし。さはいへ世のならひにて、字義にはかかはらず。湯茶ばかりを沸せども、その名は薬罐とよばれ、薬ばかりに用



ふるも、茶碗は茶わんの名をのがれず、されば、容のねなじき故に、妖物の見こしも、また、書のへまムシも、蛸も、入道の號あれば、我を坊主とも法師ともよばいよぶ人に随ふべし。

剃つてこそ月にまことの影法師

○臍頌

臍を不用の物なりとは、我も誇りし人の數なり、されば、他の一寸は見にて、わが一尺は見にすどか世にやくなきものくらべせむには、まづ我こそは先なるべけれ、そもかの臍は物やは食ふ、素餐の誇もなし、さらば、物やはいふ、三緘の警にも及ばず、わが世にありて、物を費すには似るべからず、人の支體に不用を論せば、男の乳ばかりこそいかなる益のあるとも見にねど、今更これらをとり拂は、腹は渾沌王の面影して、世にすげなきものなるべし、いでかの臍は、頓死急症のせんかたなきにも、先とて

是に灸する時は、泉下の首途を留るためしも多し、扱こそ腹のさしも草只たのめどもよみ給ひけん、たどへ項羽が山を抜く力も、此垢を取れば忽に落つどぞ、痛悔臍をかむとは、漢文の古語にして、我朝に人を嘲りては、臍が笑ふともいへりけり、しかるに、つましき隠居ありて、臍かねといふを溜められしより、天津空の鳴神もこのもしがりて、いかで是抓むとし給ふより、女ご、わらべの氣づかふ事は、麝香の狩人を恐るゝにもこゑたり、むかし祖翁の古郷にかへりて、臍の緒に泣年の暮と懐舊の袖をぬらさせしは、耳も及ばし、鼻も及ばず、かれはかく風雅にも大功あれば、今は我身を何にたどへん、されば、臍はわが下に立む事かたくとも、われも又、臍の下といはんは、何とやらむ場所よからず、かれにならば、むとするに、天に二つの日なく、腹に二つの臍なきためし、まかれれば、上下の品定はやめて、けふより只かれをそしるましとぞ。



友とせむ臍物いはい秋の暮

○夜着頌

まくらといへる和訓はいかなる故ならむ。蒲團とは字義いとむつがし。夜着る故に夜着といふは五尺の童子も義解に及ばず。媚を求めぬ自然の名にして、俳諧の正風とても、是を鑑とはいふべかりけり。此物下さまに在りては、蚊屋と矛盾の中にて、雁と燕の行かふ如く、多くは質屋へゆき返るこそわびしきわざなれ。昔孫農は是をうき瀬に流してより、藪一つかねに冬を送り、我國の聖主は、寒夜にぬがせ給へる有がたきためしも有るを、空蟬のもぬけを恨みしは以ての外の不埒といはむ。鴛鴦のかたらひには、どめ木をくゆらせ、旅のかりねには、順禮の風をのこす。なべては此物冬の用にして、夏は必遠さけらるゝに、我は多病の枕低さをさらへば、夏も疊みてよりかゝりどす。殊に此君なくてはと、四時にかは

らず愛する中より、聊發明する事あり。そも世に不用の用といふ事ありて、人に其心のさとしがたく、莊子が喩へていへるにも、地に入用は足二本をいゝ所なれど、其餘を不用とて地を堀うがちなば、二本の足もはてふ用なからむ。其空地を全うするが不用の用といふものなりと、是も喩のさる事ながら、問ちかく此理を知らむとせば、今此夜着の袖といふものを見るべし。手を通すべき用はなけれども、今不用とて是を闕きなば、徳利子のすげなきに似るのみならず、是を左右に覆ふか故に、手を働き寝がへるにも、自由のくつろぎとなり、をのづから重しとなりて、寒を防ぐの便となる事、鳥に翅のあくて叶はぬがごとし、されど、人々常に馴れて是に心のつかざるべし。されば、こよひも此夜着を引きかぶりて、蒲團よりあたゝかならば、不用の用をささるべしと、その童子にをしへ待る。



夢をのせて飛ぶ翅あり夜着の袖

○吊不幸文附六林

君さけや、鳥にあらざれば、鳥の心を知らず、魚にあらざれば、魚の心をし  
らず。君愛女を失ひて、貫之が涙袖を浸し、長嘯のいたみ襟に満つ。定めて  
知る、どふらふ人々の少し物わきまへたるかぎりは、例の天命を説き、哀  
んでやぶらすなといひて、忘憂の物をすゝめ、只あきらめよ、忘れよ、と君  
がもとよりしりたる事をくり言して、うき世の義理の蒸籠を贈り、ある  
は、樹木の菓子籠に長口上をもつらね添ふらん。いかで、饅頭に涙かはか  
ん。何ぞ栗柿に悲をまぎれん。果は出入のうば、かゝが懐を高うして、もら  
ひ泣とは是をしもいふにや。是たゞ鳥にして魚を吊ふなり。我も近き頃  
十九の愛女を先だてたり。されば、君が心我よくしりぬ。君又始めて我を  
察すべし。我かの魚にして魚をいさむ。只なげき給へ。けふも歎き、あ

すもなげき、なげきくゝてゆくままに、なげきの森に秋ふけては、柞の色  
のうすきをも覺らむ。七々の日の法事には、萬行の涙千行に減し百ヶ日  
の墓参には、百行や、十行にしてやむ。まして一周忌のかい餅は、その日  
の空の腸は断ても、砂糖つけて最一つともいふべし。されども、節の膳  
をならべ、桃に雛の祝ひ日には、あらましかはの怨は盡きず。盆の踊の手  
拍子は、人しれぬ胸にこたへて、此かなしみは、一生の病なりとしり給へ。  
されば、子の親をうしなひてこそ、手ふれし調度、目にめでし草木までも、  
長くとどめてそこなはず。是を見、かれにつけて、したふ心を忘れじとは  
するなれ。今君が歎きたぐひ、世の例の別なれば、書きのこせし筆の跡も、  
鬼どももて引やり捨て、手なれしものも火にうちくべて、兒女の態をな  
なし給ひそ。かくして早く住吉の岸なる草を求めむには、しかず。噫、我今  
先達の顔して君をいさむ。君また先達の顔して、たがあすの身の上をか



いさむべき、只あだし野の草のもと末さだめなき露こそかなしけれ。  
跡の鷹先へどひたり秋のそら

○一徳辯

鞠をすかぬ人は九損ありとをしり、好く人は一徳ありと尊ぶ。あらゆる遊藝、九損はこれに限べからず。もしは、十損もしりがたし。さはいへいかなる不用の事にも、しひて求むれば一徳もなしといふ事なし。つらくれもふに、人のもどめてなす業の外、天よりしからしめ、身に備りたる業は何ぞといふに、只飲食と、二便とにとどまる。然るに、飲食の重きこと、聖主の國を養ひ、民をめぐむといへるも、畢竟はただ飲食なり。さるから、奢れば法にすぎて、三條中納言の大食には醫師もあきれて逃げ、何曾が萬錢、よく料理人の手も廻らず。されど、二便はこれが類にてもなし。雪隠に高麗縁の疊を敷き、さんかくしに蒔繪を粧ひ、たとへねかはを梨子地に

すども、いくばくの費をかなさん。道具好の茶人ども、南京青磁のしゆ瓶は尋ねず。しかれば、出入の違ひありて、飲食とは各別のさた也。そも又、大小の二ツが中に、大は人の平生に長雪隠の時をうつすも、纒に一晝夜に一兩度に過ず。只小便のわづらはしき、さのみ隙はとらねども、しきりに是を催す時は、いかなる公卿僧正も、輿車にたまりかね、武者の戦場に急なる場にて、草摺をたゝみ上げて、思はぬ敵に後をも見すべし。まして、談義芝居の中に、こらへ袋の切かゝる時は、群集の膝をれし分け出て、往生の要文を聞もらし、大事の狂言の所作を見残し。あるは、下馬先に供をはつす鎗持、長舟にもみ尻する女中あど、是が爲に惱さるゝ事、世に多し。されど、馬方小物の身の上のみ、あるきながらもやり放し、清水をけがし、雪にも跡をつけて、人目を耻ぢぬは論するにたらず。かくとりへなき物なれども、猶其徳を尋るに、地藏の開眼に、一休の法力は茶のみ啻の



眞偽をしらず。昔鴻門の會に、高祖は是にかこつけて、危き座敷をはづし給ひ、越王はこれをなめて會稽の恥をすゝぐ。今も世上の途中にて、いやなる人に行きあふたる時は、たちやどるべき家もなく、逃る方なき道芝の露とこたへて消えたき時には、件の用をどゝのふ振にて、やがて溝端に後をひけて、時宜にも及ばず、道り過ぐしたる、そのことなくてはいかで、この難をのがれん、之を小便にも一徳ありといふべし。幼子の居放たれば、乳母の油断と叱られて、その子の科にはならざるを、老人の取りはづしたるは、子にも耻かしく、娘にうとまれて、老てふたいへ兒とはいへど、昔の子より大きにきたなし。さしても老の身の苦しき、霜牙ゆる夜もすがら深草の少將の九十九夜を一夜の心地して、見る人もなきといひけん、師走の月をあかぬ顔に詠めて、折々かよふ寒さは、御衣を脱がせ給ひけん、有がたき御心にも、これまでのことは思ほしもよらざるべし。あ

はれ、今宵も風さわがし、幾度の行きかひかせんと、寐よどの鐘に寐所とどのへて、例の縁ばなにまづ出立でたるに、餘所にも夜なべの身じまひにや、戸のがたくくと鳴音のしければ、一首はかうぞ思ひつきける。

死さまに念佛申さぬ人はあれど

ねさまに小便せぬ人ぞなき

○拾扇説

人の手より得るを賜といひ、交易して得るを賒ると云ふ。もらへば謝するの禮あり、買へば價に高下の論あり。二ツのせはをはなれて、拾ふといふ幸あり。住吉の濱の小貝も、秋の山路の落栗も、ひろふは拾ふ物ながら、それはあるべき所にあれば、幸のさたには及ばず。思ひがけざるところに得るを天の與へともいひて、人のよろこぶとなるをや、されば、慾に爪長きをのこは、天もあたへぬ物を望んで、くらがりに狗子をつかみ、牛の



糞に手を汚す。求めては得がたきならひ。かゝる愚人は論ずるに足らず。金銀を拾ふは、ことに幸の甚しきに似たれど、それは落したる人に穴があきて、身上破滅に及ぶもあれば、心ある人は其ぬしを尋て戻し、又は心のぬぢけ人はかくして戻さぬ不埒もあれば、其ぬしの怨をおひ、世話を拾ふ筋ともなり、災を拾ふ端とも成りぬべし。このころ知樂舎の主人途に一柄の扇を拾へり。是人の落したる物ながら、其ぬしはたゞ腰を撫て、是はといひたるばかりにして、さして惜しども、妬しども思ふべからず。世に澤山なる拾ひ物ながら、其書は松竹草花にもあらず。鯉の龍門に登れる書とぞ。されば、此人の心に、つねに願望のかゝれるありて、天にも、神にも祈る中に、此登龍門の吉兆を得たるとをたのもしき物にして、歡ぶと大かたならず。むべありや、其知樂舎の號も元は其住めるあたりの青木川の鯉によりて名づけたる謂あればならず。さるや、怪みを見ても恠

まざれば、其わやしみ破るとぞ。よろこびを見てよろこばし、其悦はた空しからじ。比は雪解て梅咲く折なれば、戯れてかくいひ贈る。

鯉はさそな鳥賊さへのぼる春の雲

○謝無馳走辭

こよひの主人野有人とに謝してまうす。ことくしく招きまゐらせて汁に園殿の鯉も料らず。皿に張翰か鱸ももらす。夜食は例の奈良茶に濁らして、豆腐に鯉の花の名はちらせど、何をよし野の色香とはめてむ。さはれ、旅路の椎の葉にもるものゝさびしき山家にもあらず。肴は宮の夕わがりを荷ひつれ。八百屋に二月の瓜をならぶれば自由はこゝも都ながら、もとより曾我の内證にして、いとなみどゝなふにわびしければなり。人々俳諧に信ましまさば、いさはしをもにくみ給ふないでや、かの土器の味噌を思しすて給はずば、風雅に喰寄の他人むきを離れ、けふを龜



菜の矢合せとして、雨の夕べ、雪のあした、鍋摺粉木はさばがさずとも、い  
さど心のむかふにまかせて、折々の廻状をはじむべし。さるも、貧富は等  
しからず。我をそなたへ招き給はむに、膏梁珍味のきらひならねば、よき  
魚、よき肴はかへても給はらむ。まして茶ばかりたまはるとも、吾門のあ  
そびならば、はた、かこちまゐらせじ。けふの無馳走は、紫隠里の掟にして、  
菜根咬得は百事なすべしと、貧の風雅の方人とはし侍るなり。

魚うりの聲よそにふけ青嵐

○送咳氣神表于時在武州

今年秋の初かせ身にしみわたるより、老どなく、若きどなく、疫氣になや  
みて、清涕の露草葉を争ひ、穗薄のかしらふらつきて、喰物の味をもいざ  
しら河のそれならずも止めがたきせきに苦しみぬ。上は玉だれのひま  
より煎薬のかほりほのもるゝより、下はあやしの柴をる人までもかし

らをかからげずといふ事なし。芝居入なうして、益狂言の櫓幕、いたづらに  
絞り上げ、色里客たえて夜見世の行燈かかぐるによしなし。葛西の瓜畑  
も下冷に守る人なければ、隅田川の渡守も發熱にこがれゝて水馴竿  
の細元でを流す。祈禱の法師も長髪に忍辱の姿を失ひ、貴禰も祝詞の聲  
うらがれたり。醫者賣薬の門のみ賑ひて、きのふ刺のヒ先も正氣散にや  
すひひまなく、かれらは時を得たるに似たれど、さして手柄の療治なら  
ねば、はかゝ敷薬代もよるまじ。噫、此秋いかなれば、かゝる災を下して、  
吏民にくるしみをかけ給ふぞ。願くは天神地祇、愛愍の眸をめぐらして、  
咳氣の邪神を速に西の海へ送り給へ。さらば臣等も幣帛のむづかしき  
わざはしらすとも、笹の葉にしで切かけ、太鼓をならして及ばすながら、  
力を合せ奉るべしと、丹誠を抽じて告奉る微志を、それみそなはし給へ。

○燒蚊辭



あのか身ひとつは、たゞ塵ひちの幽なる物ながら、類を引き、群をなし、夕のせとに柱を立て、軒端に雷の聲をなし、貴賤の肌をなやますより、世に蚊帳といふ物を以て、汝を防ぎ、末々の品に至るまで、誰か一釣の紙帳をもたさるべき。積りて世の費いくばくぞや。されば、虻の利背、蜂の毒尾も、しひて人を害せむともせず。既に仇の通る時、是をもて防がんとするは、人の刀鋸を帯するにひとし。汝か針は、只人の油断をうかひ、口腹のため、にひさぼらんとす。たま／＼蜘蛛の巢につゝまれ、人の手に握られて、其針を出すことあたはず。然れば、巾着切のはさみには劣れり。今宵一把の杉の葉をたいて、端居をこちよくせんとすれど、猶も透間をうかひ、憎さに、ねどなげなきわさながら、紙爛をして汝を駈る。ひとへに汝が業火なれば、他をうらむ事あるべからず。さるにても淺ましき、汝が身を觀すれば。

火をとりに来ぬ蚊は人に焼れけり

○新古巷記

數寄者ありて、其閑居に名あらむとを予に請ふ。請へば辭し、辭すれば請ふ。請ふと辭すると織るがごとし。遂に辭しまけて止とをすす。されば、予か辭するは茶道に疎ければなり。知らざれども、はた是を思ふに、此道はそも古式ありて、一事一蓋も矩をはづさず。はづせば放埒の謗りあり。茶杓のあつかひ、ふくささばきも、さすて、ひくでの舞曲ならぬは、さして上手のけじめもわかれじ。しかれば、古き二の舞して何の面白きとかあらむ。それを面白がるは其故あり。同じとのかはらざれども、きのふの古きもけふすればあたらしく、けふの新きはあすの古きにして、まして道具も古きを賞すれども、用ふる心は日々にあたらし。新しき物の古くなるは、天地自然のことにして、古き物のあたらしくなるは、人の才覺、智のは



たらしなるをや。さればこそ、目に見えぬ鬼神も我を折り、武きものゝふも丸腰の交をなせば、一椀のつけさしに男女の中立とも成べきを、傾城の客なき宵を御茶ひくどはいかにぞや。予が此論もし偶中ならば、主人の取るとあるべし。そこを天道まかせにして、新古菴の記と題して贈りぬ。誠はせめをのがれむための御茶にござらすといふ物か。もし早合點の人開きてしんことば、團子のことかといはば、よしそれも茶うけのさひとなるべし。

○鳥獸魚虫の掟

世上困窮につき、今般鳥獸並虫のともからへ一統の簡略申付候。其外行作悪敷品相改申渡候。左の條々急度相守申べき事。  
一蟬すすしの羽織を着候事、過分の至に候。向後は横麻一羽ぬきに仕替申べき事。

一松虫鈴虫のともから、籠のうちにて砂糖水を好み、奢のさたに候。向後は野山の通、露ばかりにて精出し鳴き申べき事。  
一蟻塔を組む事、自身の功を以て建立いたし候儀はくるしからず候。寄進奉加等頼み候義は一切いたすまじく候。且又熊野へまゐり候に大勢連にて無益の事に候。以後は二三人づゝひま次第に参り申べき事。  
一螢、夜中火を燈し飛行の事、町々家込の所は火のもと氣遣敷候得ば、遠慮いたすべく候。池川田地等の水邊はくるしからず候事。  
一蜘蛛、御領地の内においてみだりに網をはり、諸虫を捕ふる事、不届の至に候。以後は其場所相應の運上さし上申すべき事。  
但蠅とり蜘蛛は運上に不及事。  
一蜜蜂の小便高直に賣るよし、諸方の痛になりよろしからず候。向後は世間一統に唯米六升ほどの積を以て相はらひ申べき事。



一 蟾螂、己が短慮の我慢にまかせ、斧を以て諸虫を殺害いたし、不屈千萬に候。向後はひね打をも一切いたすまじき事。

一金魚のともがら近年ことに花美に相なり候。向後金銀の飾一せついたすまじく候。

但赤塗に砂箔等まではくるしからず候。

一 蛤、春暖のころ、己が快晴にはこり、樓閣を建候事、甚奢のさたに相さこえ候。向後は右躰の普請一切無用に候。もし居宅の柱損じ候とも根つさいいたし申べき事。

一 蝙蝠、晝は橋下にかくれ居り、夜は人里村里へ徘徊いたし候と、其意を得ず候。鳥獸のあらためこれあるせつは、何方へも申ぬけ、役義等相つどめず候よし、不屈の至に候。向後は立合の支配をうけ、兩役屹度つどめ申べき事。

一 音喚鳥、猥に五色の錦繡を着いたし候事、甚奢に候。向後は何色にても、一色に相改、勿論縫箔等一切いたすまじき事。

一 白鳥、白雀等、此間は相見え候。先年は頭ばかり白きさへ稀なるとに候ところ、近年猥に相なりよろしからず候。以後會て異相の躰いたすまじき事。

一 鼠、嫁入の躰ことしくしく相聞え候。廿日鼠に五升樽もたせ候こと、過分の至り、以後は提錫にて相濟し申べく候。振舞の上、天井にて躍なご催しさはがしく候。人々の妨に相ならず候様、明き二階、椽の下等にて、盆の中躍り候とくるしからず候。

一 狸々、つねに大酒を好み、亂舞の樂、奢のとに候。潯陽の江邊にて持出しふるまひ、向後一切無用たるべく候。據なき義にて會合これあり候ども、一種一献にかざるべく候。其酒摸寄のうけ酒屋にて、小買いたし申



べき事

一狸、ふぐりを四疊半にのばし、茶を立て、人を迷はし、諸道具に金銀を費さしむるとよろしからず候。右の業相止申べく候。自分の樂としてはら鼓打ち候事はくるしからず候。

一馬の太鼓の義、往還問屋前を憚らず、不禮の至に候。畢竟これも榮耀のことに候へば、以後は相止め申べく候。

但し、麻にては苦しからず候へども、火の見時の太鼓にさし合ひ申さいるやうつゝし、み申べき事。

一青鬼、赤鬼のともがら、虎の皮の揮いたすまじく候。當時病犬の皮澤山に候へば、早速仕かへ申べく候。

但し、右は家持、頭分の鬼の事に候。借屋住、召仕の鬼どもは、古き桐油合羽の切を腰に巻き用ひ申べき事。

右の條々かたく相守り申すべく候。忽に心得違これあるやから有之に於いては、急度咎申付べく候。品により蟻の町代組頭まで越度たるべく候。

寶曆九卯七月

○奈良團扇贊

青によしならの帝の御時、いかなる叙慮にあづかりてか、此地の名産とはなれりけむ。世はたゞ其道の藝くはしからば、多能はなくてもあらましかれよ、かしくも風を生ずるの外は、たえて無能にして、一曲一かなでの間にもあはざれば、腰にたゞまれて公界にへつらふねぢ心もなしたゞ木の端と思ひすてたる雲水の生涯ならむ。さるは、桐の箱の家をも求めず。ひさごがもとの夕すゞみ、晝ねの枕に宿直して、人の心に秋風たてば、また來る夏をたのむとも見えず。物置の片隅に紙屑籠と相住し



て、鼠の足にけがさるれども、地紙をまくられて野ざらしとなる扇には  
まさりなむ。我汝に心をゆるす。汝我に馴れて、はだか身の寐姿を、あな  
して、人にかたる事なかれ。

袴着る日けやすまする團扇かな

○案山子辭

守るとせしれくてのいな葉蒔りばて、山田の畔にひとりたてるか、  
しあり、むれわたるいな雀の落穂ひるひけるが、例の口さがなくてわら  
ひけるは、養由は百歩に柳の葉をはづさず、義家は鳴弦を雲の上にひ  
かせ、頼政は鶴を射る。その外武將名士の弓箭に功ある、みなその藝を發  
して世に名をふるへり。あんどや、あやしの竹に繩はりて、射る事しらぬ  
弓の形をいつはり、我輩をわざひかんとするや、案山子これに答へてい  
ふ、ひかぬ弓、放さぬ矢にて射る時は、中らず、しかも、はづれざりけり。とよ

みける歌の心をしらすや、そも奥州の鳴弦も、矢は放さずして徳をあら  
はせり。麟は角をそなへたれども、肉ありて物をやぶらず。むかし忠盛の  
闘討も木太刀に身の難をのがれてこそ、かしこしと人にははほめられつ  
れ。しひて物をやぶりそこなひて、後、その功をなさむとするは、愚將のあ  
す所なり。いでや、かの鵬といふ鳥を聞けりや、九萬里に羽うつて翼垂天  
の雲のごとし。たどりかねて憩ひるふ汝らがよくその心をしる所にあ  
らず。いかで我をみ、づくに類してみだりに笑はんとするか。雀あはも  
口々にいふ、されば、その大鵬の雲に羽うつは、莊子の例の大嘘にして、斥  
鴞のよもぎふに飛ぶは、今見る所の實なり。ただその實を以ていはむ。世  
に鶴といへるものだに千とせの齡はことよかるれども、今は是を取て  
大袈に屠られ、羽は矢にはがれ、殻は黒やきにして、何かれの薬とて争ひ  
求めらる。鷹はこれらをも組敷きて其功上に出づるに似たれども、その



蕨のすぐれたる故に、朝三暮四の餌をわてがはれ、足をつながれ、架には  
だされて、雲をこふの愁をまぬかれず。しかじ世中の人には、葛の松原に  
一枝のねぐら求て、淺茅か露にかくれやすからむには、そもや、汝が身に  
あきはて、稻くさ巳に霜寒し、などや、五湖に棹さして、蓑笠の塵をはら  
はざるや、他をそしり、我をしらざるは共にいふべからず。昔うぐひすは  
歌をよみたれども、それは花に啼くぬめりなりとて、

捨時をしらぬ案山子の弓矢かな

と囀りて去らむとす。案山子猶よびとめて、汝かしこきに似て、又わが  
心をしらす。そも笠を誘るや、蓑をそしるや、其句の返しにはあらず。ただ  
此歌をさけとてよみける。

是は笠これに蓑とてのけたれば

あとは何かか、しなるらむ

○絲瓜辭

ひくつけきふくべも、ひさごといへば、伏猪のやさしみあり。花はまして  
夕かほの人めきてよそへるを、此ものへつらはす。うき世をへちまど  
名のりけるより、源氏の御目もとどまらず。まして歌よみは此名にもて  
あつかひて、こちらの料理にはつかはれずとて、はからかし捨たるを、やが  
て俳諧師のひろひとりて、己が垣ねには道はせたるなり。その味の美な  
らねば、鶉もぬすまず。蟻もせゝらす。鉢坊主もみかへらねば、隣の人をも  
うたかはす。

草刈のそしるをさけは糸瓜かな

猶又、いみじき疝氣の藥なりとて、こゝに此翁の愛するにぞありける。む  
かし水の流に光さして、楊柳観音のあり所はしられ、栗栖野の柑子には、  
きたなきあるじの心をさへしられつ。白壁のらく書には醫者の家なる



事もしらるべし。されば、色をも香をもしらさればしらす。しる人はありぬるかし。

垣にへちまさてはあるじも疝氣持

○百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしきもの、かぎりなるべし。それも啼音の愛なければ、籠にくるしむ身ならぬこそ、猶めでたけれ。さてこそ、莊周が夢も此物には託しけめ。只どんほうのみこそかれにはやや並ぶらめ。糸につながれ、繭にさゝれて、童のもてあそびとなるだにくるしきを、あほうの鼻毛につながるゝとは、いと口をしき諺かな。美人の眉にたどへたる蛾といふ虫もあるものを。

子を持てるものは、その恩愛にひかれてこそ苦勞はすれ。蜂の他の虫をとりて我子となす、老の行衛をかゝらんとにもあらず、何を譲らむとて

かくははねをるや、我に似よ〜とはいかにをのが身を思ひあがれるにかあらむ。花に狂すとは詩人の稱にして、歌にはさしもよます。蜜をこぼして世のためとするはよし。只人目稀なる薬師堂に大きな巢作りて、掃除坊主をねびやかさんどす。それも針なくは人にははにくまれじを。蛙は古今の序にかかれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。臘月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば、此物の事さらにも誇りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほどが善きなりや、日さかりに啼きさかる比は、人の汗しぼる心地す。されば、初蝶ども初かはづともいふ事をさかす。此物ばかり初せみといはるゝこそ大きな手がらなれや。がて死ぬ景色は見へずと、此ものゝ上は翁の一句に盡したりといふべし。はたるはたぐふべきものもなく、景物の最上なるべし。水にとびかひ、草



にすだく五月の闇は、だゞこの物の爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに貧  
の學者にとられて、油火の代にせられたるを、此もの、本意にはあらざ  
るべし。歌に螢火とよませざるは、この外の不自由なり。俳諧にはその  
真似すべからず。

日ぐらしは、多きもやかましからず。曇さは晝の梢に過ぎて、夕は草に露  
をく比あらん。つく／＼ぼろしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑  
紫の人の旅に死して、此物になりたりと、世の諺にいへりけり。哀は蜀魄  
の雲に叫ぶにもねどるべからず。

蜘蛛はたくみに網をひすんで、ひそまつて物を害せんとす。待つくれの  
歌によまれ、又は退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありてい  
どにくし。古代の朝敵の始として頼光をさへおびやかしたる、いとれそ  
ろし。さはいへ廢宅の荒たる軒に、蟬の羽なごかけ捨てたるは、いささか

おはれそふ折もあらんか。かれはかひ／＼しく巢つくりてこそあれ。東  
海道にちりぼひたる宿なし者をば、蜘蛛とはいかでいふやらむ。

芋虫は腹だつものに譬へ、毛虫はむづかしき親仁の號とす。春虫客虫は  
名のみにして虫ならず。油むしといふは虫にありてにくまれず。人にあ  
りてきらはる。

蠶の生涯は世の爲に終り、火とりむしはたがために身をこがすや。蟬  
ははかりなきためしにひかれ、蓼くふむしは物すきの誘となれり。さは  
俳諧するものを俳諧せぬ人のかくいふ折もあるべし。

ねなヒ寶の名によばれて、玉むしはやさしく、こがね虫はいやし。  
蟻は明くれにいそがしく、世のいとなみに隙なき人には似たり。東西に  
聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事  
を得む。さるも、たよりあしきかたは穴をいとなみて、千丈の堤を崩すべ



からず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。

狗の齒に噛る、蚤は、たま／＼にして猿の手にさぐらる、虱はのかる、事かたかるべし。

虱を千手觀音と呼ぶに、蚰蜒は梶原といへり。さるは、梶原が異名なりや、けぢ／＼が異名なりや、先後今はしりがたし。

蝸牛は只水に有るべきもの、いかで草葉に遊ぶらん、家は持ちたれども、ゆく先々を負ひあるくは、水雲の安きにも似ず。

蛇、蚯蚓の足なくてもあるべくは、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蟾螂の瘦せたるも、斧を持ちたるはこりより、その心いかつなり、人のうへにも此たくひあるべし。

蟹のあゆみにたどふべきものこそなけれ、たゞ原、吉原を駕にのりて、富士を詠め、ゆく人には似たり。

促織、鈴虫、くつわむしは、その音の似たるを以て名によべる。松むしのその木にもよらでいかでかく名を付けたるならん、毛生ひむくつけき虫にも同じ名有りて松を枯し、人にうとまる。一ト在所にふたりの入兵衛ありて、ひとり後生をねがひ、ひどりは殺生を事とす、これ松むしのたぐひなるべし。

きり／＼すのつゝりさせとは、人のために夜寒ををしへ、藻にすむ虫は我からと只身の上をなげくらんを、袋虫の父よと呼ぶは、守宮の妻を思ふには似ず、されど、父のみこひて、なごかは母をしたはざるらん。

蚊はにくむべき限ながら、さすが卯月の比、端居めづらしき夕べ、はじめてはのかにきゝたらむ、又は、長月の比、ちからなくのこりたるは、さびし



さかたもあり蚊屋釣りたる家のさま蚊やり焼く里の烟などかつは風  
雅の道具ともなれり藪蚊は殊にはけしきをかの七賢の夜咄にはいか  
に團扇の隙なかりけむ。  
ひかし銀に執心のこまし仕持は蛇となりて鏡箱をまとい花に愛着せ  
し佐國は蝶とありて園に遊ぶうも俳諧に心とめし後の身いかなる虫  
にかなるらん花にくるひ月にうかれて更け行く行燈の影をしたひな  
ら茶の匂ひに音を啼くらんこそ哀なるべけれ。

俳壇  
偉人横井也有畢

明治三十四年九月廿二日印刷  
明治三十四年九月廿五日發行

俳壇  
偉人横井也有畢  
十  
金貳拾錢

編輯人兼

森下松衛

東京市本郷區彌生町三番地は拾壹號

印刷人

言田章五郎

東京市神田區柳原河岸十七號地

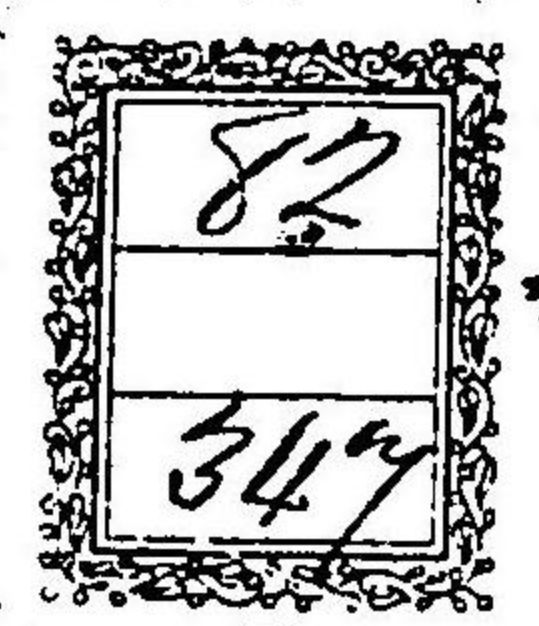
印刷所

日新舎

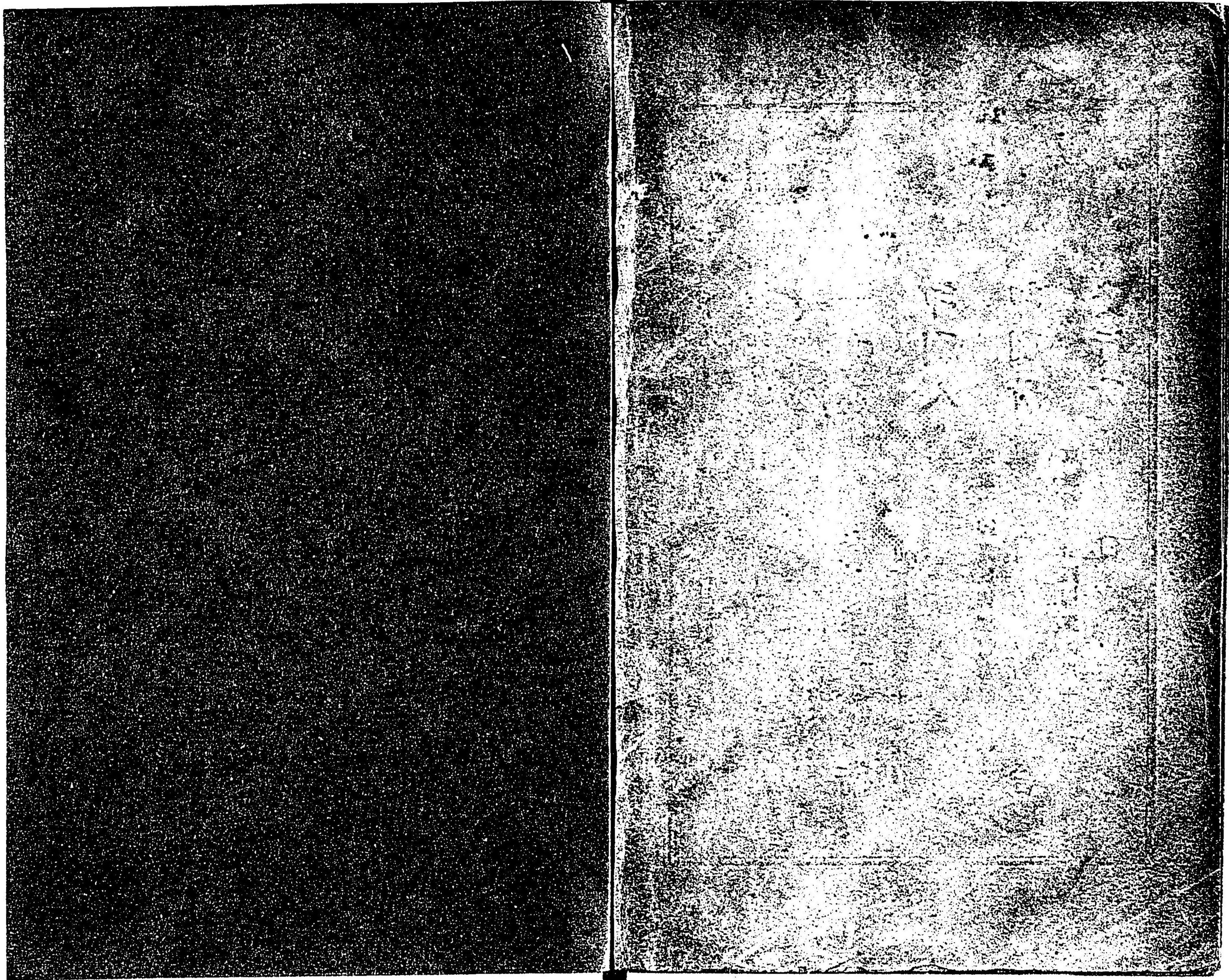
東京市神田區柳原河岸十七號地

發行所

日新舎



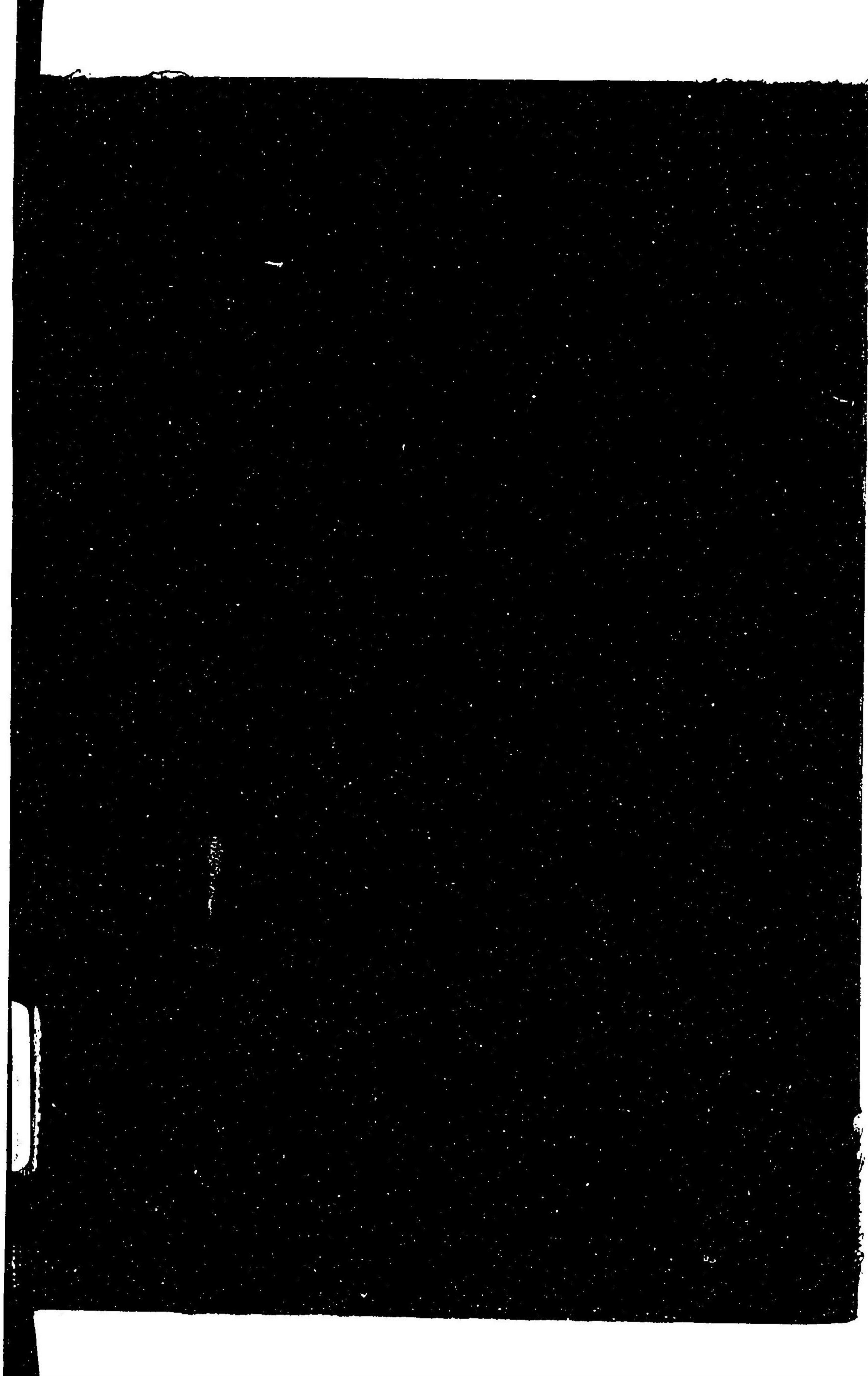






82  
347







82-347

087664-000-4

82-347

横井也有

森下 松衛 / 編

M34

DBE-1113





